
エイト・アイズ

サカガミ ヤスヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エイト・アイズ

【Nコード】

N3458B

【作者名】

サカガミ ヤスヒロ

【あらすじ】

狐宮龍弥は天才である。天才であるが故に子供のころから色々と危険な目にもあった。なので、護身術として武道もたしなむ（達人レベルである）。しかし、彼はある日突然事故に遭い、死んでしまう。彼と友人達の数奇な運命の物語。

プロローグ（前書き）

読みやすいように、編集しました。

プロローグ

普通の人間には認知できない場所で、少年が取り囲まれていた。人ではない、人にあらざる者にある。その数は軽く百を越えている。少年の隙を狙うようにうごめいている。

「ちっ、閻魔様の情報間違いじゃねえか」

少年は毒づき、しかし、この状況を打開すべく思考を開始する。数瞬の後、彼は自分の能力を発動する。

「いくぜえ！龍王開眼・紅蓮双剣！」

少年の黒い瞳が赤く輝く、同時に両手には赤い刀身の日本刀が握られている。

「無天一流・独楽斬り」

少年は舞を踊るかのように回転しながら剣をふるう。

赤い刀身からは炎が吹き出し、剣で直接斬られた者以外も炎の波動で燃え上がっていく、一体、一体と減っていく数分で死体さえも燃やし尽くしてしまった。

「さて、帰って閻魔様に文句・・・、いや、報告するか」

悠々と少年は帰っていく。

それと同時に・・・。

「ふふふ・・・、この程度の敵では本気を出すまでもないということかね？狐宮龍弥君？」

少年を映し出したモニターを見つめながら男が微笑を浮かべていた。

プロローグ（後書き）

初投稿で連載挑戦です。まだプロローグで先も大分長いですが、おつきあいいただければさいわいです。評価もどしどしお願いします。

第一話：事故前日の情景その1

「お前は金のなる木だ」

倉庫のような場所で目の前の男が話し掛けてくる。父親ではない、見知らぬ男である。

・こいつは昔俺を誘拐した・・・、これは夢か。

「お前の身代金、そしてお前を組織に売って得られる金」

「こんなことをして、許されるとでも思ってるのか？」

・我ながらよくこんなことを言ったものだ。・・・もうそろそろかな？

「お前、状況わかって・・・」

パリーン、ガシャーン

ガラスの割れる音とともに発煙筒が投げ込まれる。十数名の人間が一斉になだれ込んでくる。アサルトライフルを手にした『SAT』と書かれた服を着たその集団はあつという間にその場を制圧してしまった。

・でも、よく警視庁の特殊部隊が動いたよな、親父一体・・・

「大丈夫かい？」

SATの隊長らしき人物が縄をときながら話し掛けてきた。

「あ、はい大丈夫です。ってあれ？ふつうにしゃべれる」

「本当に大丈夫？」

隊長の声がいきなり、十代の女の子の声になる。

・ん？どこかで聞いたことがあるような・・・。

「お兄ちゃん！本当に大丈夫？」

・お兄ちゃん？

「つていうか朝だよ。起きて！」

いきなり、隊長に抱き付かれて（ダイブされて）目が覚める。

「ぐわはあ！？え？里緒菜？」

この女顔じゃなかった、女好きのする顔でもものすごく動揺してい

るのが今作の主人公、狐宮龍弥である。そして抱き付いている美少女が、妹の里緒菜である。いきなりダイブしてきた里緒菜に対し、龍弥は文句をつける。

「里緒菜、抱き付くのはいいけどさ、もっとそっとなしてくれない？」

「鍛えてるんだから大丈夫でしょ？今触っててもいい体してるのわかるし」

色々とツツコミ所は有りますが、話を進めるために、無視します。
(二人ともちゃんと服は着てます)

龍弥は目頭を揉みながら、仕方ないという表情で言葉を発します。

「里緒菜、俺の上から降りてそこに座って？」

「うん」

里緒菜は素直に従います。

「んでもって目を閉じる。」

「え？うん」

これまた素直に応じる里緒菜ちゃん。きっとこの娘は騙されやすいだろうな。

すると龍弥は、里緒菜の肩を掴んでいきなりキスをしました。(唇ではなくておでこにですが)

里緒菜は茹でダコみたいに真っ赤になり、カチンコチンに固まってしまいました。それでも必死に声を出します。

「お、お兄ちゃん？」

「ん？朝の挨拶だけど」

「で、でも・・・」

パシーン！！

どこからともなく取り出したハリセンで龍弥は里緒菜を叩いた。
当然文句を言う里緒菜。

「お兄ちゃん、なんで！？いたいよ、ひどいよ！」

「がっかりだよ・・・」

「え？」

「お前のボキャブラリーの無さにがっかりだよ！！ここは、欧米か！とか、ツツコムところだろうが！というわけで、罰として俺に抱き付くのと俺の部屋に入るの禁止ね」

「えー！そんな理不尽な！」

「期待に添えないお前が悪い。それに俺の要求の方が正しいしね。ほら、部屋から出た出た。」

「えー！？あ、でも・・・ぶつぶつ。」

里緒菜が素直なおかげでまんまと追い出せた龍弥であった。

第一話：事故前日の情景その1（後書き）

前回とは少し（いや、かなり？）違った感じになりましたが、しばらくこんな感じで、最後の平和な時間を書いていきます。これからもどうぞよろしく願います。

第二話：事故前日の情景その2（前書き）

ヒロインの名前にくい違いがあつたので修正しました。

第二話：事故前日の情景その2

・やりすぎだよな。いくら寝起きが悪いとはいえ、誰かに見られたら確実に誤解されるだろうし・・・。

龍弥は運動着に着替えながら、里緒菜にしたこと（第一話参照）について考えていた。

・ま、いいか。後で謝っとけば。

思考をやめて、着替え終わると、龍弥は日課であるランニングに出かけた。少し湿った空気を浴びながら、一時間ほど走って家に帰ると、すでに朝食が用意されていた。

「母さん、ただいま」

「お帰りなさい」

「親父は、もう出かけたの？」

喋りながら席につく龍弥。母親は味噌汁を配膳している。

「会議らしいわよ」

「ふーん、いただ・・・」

「先に里緒菜を呼んで来て」

「あ、はい」

・ついでに謝ってくるか

里緒菜の部屋の前まで行き、ドアをノックする。

コンコン

「里緒菜、ちょっといいか？」

「うん、いいよ」

「入るよ」

部屋に入ると里緒菜はもう制服に着替えていて、ベットに座っていた。

「さっきの事なんだけどさ・・・」

「気にしてないよ、むしろ嬉しかった・・・なんてね。私か律花さん以外にやってたらセクハラだよ？」

「すまない・・・」

「気にしてないのは本当だよ。だから、そんなに深刻な顔しないで、あんな起こし方したら、お兄ちゃん変な怒り方するのは分かった事だしさ。」

里緒菜は終始笑顔だった。龍弥は苦笑しながら聞いた。

「あと一ついいか？」

「うん」

「なんで・・・」

龍弥が言いかけたところで母から声がかかる。

「二人ともなにやってるの？ご飯、冷めるわよ？」

「ごめん、今行く！話はまた後でな」

「そうだね」

朝食を食べ終わり、龍弥は制服に着替えて里緒菜といつも通りに学校に行くのだった。

「ねえ、お兄ちゃん」

「なんだ？」

「さっきの話の続きなんだけどさ、なんであんな事したのか聞いた
いんだよね？」

「ああ」

「お兄ちゃんが遠くに行っちゃってね、もう二度と会えないような
気がしたの」

「はあ、例えば俺が死ぬとか？って縁起でもない！」

「それはないと思うけど。とにかく、今しかできないことをしよう
と思ったの、学校とかじゃあんな事できないし」

龍弥は困ったような顔をしながら言った。

「家の中でもあれはまずいだろう？兄妹なんだからさ」

「まあそうなんだよね。それもそうなんだけど、どんな反応するか
どうしても見てみたくて・・・」

「え！そんな理由！？」

龍弥はまたもや物凄い動揺を見せる。

「ん？まさかお兄ちゃん物凄い勘違いしてた？」

意地悪な笑顔を浮かべながら、さらに畳み掛ける里緒菜。

「よし、実の妹に発情したって、葎花さんに言い付けてやる！」

「おい、止めるーいや、止めてください里緒菜様。俺、殺されちゃうから！」

もう、龍弥は必死です。

「なんでもおごるから許して！」

「言ったわね？それじゃあねえ、最近、近所にイタリアンレストラン出来たでしょ？そのフルコース」

「はあ、高そうだな……。だが、命には換えられん。いいよ」

「だそうですよ」

誰かに話し掛ける里緒菜。

「あら、それは楽しみね」

ゆっくりと振り返る龍弥、そこには恋人の葎花がいた。葎花は笑顔だったが、目が笑っていなかった。

第二話：事故前日の情景その2（後書き）

年齢と補足をしたいと思います。龍弥は16才、律花は15才で高一、里緒菜は15才中三です。三人の通っているのは同じ中高一貫教育の学校なので、一緒に登校したりします。

第三話：事故前日の情景その3

「おはよ。……って龍弥！？何だその顔は！？」

教室で龍弥に話し掛けてきた友人の飛鳥は驚愕した。龍弥の右頬が腫れていて、それを氷で冷やしていたからである。

「よお、飛鳥」

「大丈夫か？」

「っんっん」

「いってーよ、バカ！……！」

ズバシーン！！ドーン！！！！

頬をつついてきた飛鳥をハリセンで思いっきりぶつとばす龍弥。剣の達人が本気でふるったハリセンをくらった飛鳥は哀れにも床に頭をぶつけて血がダラダラです。

「ああ、花畑が見える……」

「おはよ、龍弥くん。この馬鹿はまた何かやらかしたのね？」

クラスメートの美冬があのに逝きかけの飛鳥を一瞥して、声をかけてきた。

「葎花にビンタされたんだって？」

「ああ、些細な誤解からな。……耳がはやいのな」

「本人から聞いたの、それと龍弥くん怒ってないか聞いて来てだつて」

「それじゃあ、怒ってないからそろそろ教室に入れと言って来てくれ」

「わかった」

そう言う和美冬は葎花のところに向かった。

「なあ、一体なにがあつたんだ」

復活した飛鳥が聞いて来た。すごいタフネスだな。

「その前に言うことがあるんじゃないか？まあ、俺もやりすぎたのは悪かったけどさ。」

「すまなかつたよ。ところで・・・」
「はいはい、じつはな・・・」

振り向いた龍弥は、目が笑っていない律夏に恐る恐る聞く。

「あの、律花さん？どこから聞いていたのですか？」

「最初から」

「どうして声をかけてくれなかったのですか？」

「なんか楽しそうに話してたから。そんなことより、里緒菜ちゃん何があつたの？」

「家で私が抱き付いたら、お兄ちゃんが発情してキスして来たの」

「里緒菜？それは省き過ぎじゃないか？」

「でも、一部は合つてると」

「律花さん？落ち着いて？きちんと説明するから」

笑顔が完全に消えて、すごい剣幕の律夏を龍弥は必死でなだめる。

「問答無用！」

「バシン！！！」

律花のビンタをくらって思わずよろめく龍弥。

「龍弥の馬鹿！ボケ！大嫌い！！」

律花の目には涙が浮かんでいる。事の重大さに気づいた里緒菜が慌ててフオローに入る。今更遅いような気もするが・・・。

「律花さん違うの、さっきはお兄ちゃんが寝起きのときの話だから」

「え？嘘・・・」

苦笑いをしながら、龍弥が付け加える。

「本当だよ。だから説明するって言っただろ？」

「私・・・、ごめんなさい！」

言つと同時に、チーターもびっくりのスピードで駆け出す律花。

「おい、律花？」

呼びかけたときには葎花の姿はもうなかった。

「で、そのあと頬がめちゃくちゃ痛くなってきた、教室で冷やしてたわけだ」

「ふーん。フルコースの話はどうなったんだ？」

「里緒菜は無し、葎花にはおこる」

「まあ、妥当だな」

「里緒菜は相当ぶーぶー言ってたけどな」

そんなことを話しているうちに葎花と美冬が戻ってきた。葎花は不安そうに龍弥に聞いた。

「本当に怒ってないの？」

「本当に怒ってないよ」

満面の笑顔になる葎花。これで写真集を出したらどれほどの金になるかというほどの美しい笑顔だった。つられて、龍弥も笑顔になった。こちらも、写真集を出したら・・・

「おい、勝手なコメントが多いぞ。九尾」

「いいジャン別に、減るもんじゃなし。あんただって美しいとは思ってたでしょうに」

「確かに思いはしたが、これはまじめな調査なのだぞ」

「お堅いなー、はいはい、わかりましたよ。龍王様に一任しますよ」

「貴様もちゃんとモニターを見る。われらの主になる御方だぞ」

「確かに顔は好みだけど。実際こっちに来てから決めることにしてんのよ私は」

「これは決定事項、我等に拒否権は無い」

「それならなんで調査なんかしてるのさ。納得いかないからでしょ」

「彼の人となりをつかみたいだけだ。なかなか好感の持てる人物だ」

「あ、そう……。でも、こんなに笑って、明日何が起こるか知らないと気楽なものね」

「それを言うな……。調査を続けよう」

その日は終業式だったようで、LHRが終わると午後から龍弥たちはそれぞれ部活をしていた。

「一本！それまで！」

龍弥の所属する剣道部は、大会が近いせいか、基本練習の後、試合形式のリーグ戦をしていた。どうやら、団体戦レギュラーの選抜もかねているようだ。龍弥は今の一本で、全勝を決め、レギュラー入りを果たしたようだ。先にレギュラー入りを果たした山のような巨漢とすばしっこそうな小柄な男が話しかけてきた。

「また腕を上げたようじゃな、龍弥。わしもうつかしてられんぞ！」

「君にしては、ずいぶん苦戦してたね」

「山神さん、韋駄さん。お疲れ様です」

龍弥はゆっくりと面をはずした。

「どうしたんじゃその顔は！？」

「どうしたんだいその顔は！？」

龍弥は本日何度目かの苦笑を浮かべながら答える。

「朝、ビンタされて、腫れがまだ引かないんですよ」

「ほう、度胸があるのう。おまえにビンタとは……」

「朝から痴話げんかですか？うらやましいものです」

「何じゃあ、女にビンタされたんか」

「さしづめ、相手は朝倉さんあたりでしょうが」

「おしゃつるとおりですよ。韋駄さん」

韋駄は苦笑いを浮かべ、山神はつまらなそうな顔をして言った。

「わしなんか、日常茶飯事じゃぞ。女に殴られるなんぞは」

韋駄と龍弥失笑。二人とも別の話題に話を変えます。

「ところで、狐宮君。成績はどうだった？」

「いつもと同じですよ。家庭科が2で芸術が4、それ以外は5です。」

「さすが天才。僕などは普通教科と体育がオール5が精一杯で他は2だよ。」

かなりむかつく話である。全国の受験生にリンチされるのでは無いだろうか？

「二人ともだらしのないう。わしはオール5じゃぞ。」

以外や以外、この巨漢にして結構器用な山神さんであった。

そうこうしている内に、他のレギュラーも決まったようだ。

一箇所に集まり、一分間の瞑想の後、部長の山神が締め挨拶をする。

「三年でレギュラーになれなかった者は残念だったが、この経験をばねにしてこれからの受験を乗り切ってほしい。レギュラーでない一年、二年は、夏の大会の応援と秋の新人戦に向けて精進すること。最後にレギュラーになれたものは、健康に気をつけ、万全の態勢で夏の大会に臨むこと。では、一年、二年とレギュラー陣は月曜九時にまた練習で会おう！以上解散！」

「お疲れ様でした！！」×22

龍弥が着替え終わり、校門に行くと葎花が待っていた。午後4時だが、七月の空はまだ青い。

「一緒に帰る！」

「ああ」

他愛もない話をしながら、帰る二人。そして話題は今朝のことに

なった。

「今朝は本当にごめん」

「いいよ、悪いのは寝起きの俺と里緒菜なんだから」

「本当？」

「本当だよ」

「・・・あのさ、フルコースとかいいからさ、これから二人っきりでいてくれないかな？」

「ん？いまから？」

「うん、いまから。私の家で」

「いや、親御さんとかいるんだろ？」

「いないよ。二人で旅行に行っちゃったから」

「それはまずくないか？」

「いいの、お父さんもお母さんも龍弥なら許してくれるだろうし、それに、一人でご飯食べても張り合いないし・・・」

葎花にもものすごく寂しそうな顔をされて、龍弥は

「いいよ」

「ありがとう」

二人は葎花の家へと向かった。

ブッン

「あれ？龍ちゃん、調査おしまいにするの？」

調査用モニターを切った龍王に九尾がたずねる。

「ここからは、彼らのプライベートだ。そこまで見る必要は無いだろう？」

「まあ、趣味がいいとは言えないわね」

「だから、もういいのだ。明日彼が来るのを待とう」

「はいはい、じゃあこれで解散？ふう、やっと終わった。私の分の報告書も出しといて」

とつとと、寢室に帰ろうとする九尾。

「待て、こんなめちゃくちゃなものを提出するつもりか？」

「駄目？」

「当たり前だ」

「いいじゃん、べつに、怒られるのは私だよ？」

「私にも監督責任があるのだから？・・・わかった。そんなに燃されたいのか？それとも凍り付けがいいか？」

目を光らせる龍王。

「ひっ、それはやめて！書き直します。いえ、書き直させてください」

「わかればいい。ほら、待っててやるから早く書き直せ」

しかし、結局10回も書き直し、出来上がったのは翌日の朝だった。

第三話：事故前日の情景その3（後書き）

最後の平和が終わる・・・。

第四話：事故と霊界

今、俺はあの世（正確には霊界というらしい）にいる。

そして、赤鬼に連れられて、閻魔大王が住んでいるという城に向かっている。

そう、俺は死んでしまったのだ。

「それじゃあ、明日な」

「うん、明日ね」

その日、結局俺は、夕飯をご馳走になってから家路に着いた。それと言うのも、なぜか美冬が律花の家の前にいて、成り行きで二人きりになれたからだ。その代わりに明日二人で遊びに行くことにしたのでそれはそれでよかったけれど・・・。

家に着いて、風呂に入り俺は早めに就寝した。家族とも少しは話したが、どんな内容だったかはよく覚えていない。

朝起きて、いつも通りにトレーニングを終え、身支度を整えると俺は待ち合わせ場所の駅へと向かった。駅には予定より20分位早く着いたので、近くのコンビニに入った。

「よお」

変な店員だと思ったら、クラスメートの巽だった。

「いらっしやいませじゃないのかよ？巽」

「細かいことは気にすんなよ。今日はどうした？まだ8時前だぜ」

「デートだよ、デート」

「ふーん。どこ行くんだ？」

「遊園地かな？」

「なんだ、ノープランかよ」

「昨日決まっただけだからな」

「おお、それじゃあよ。今日の夕方俺ら、ライブやるから見に来てくれないか？」

巽は学校の仲間とコピーバンドを組んで活動している。中三の時の文化祭ライブはなかなか好評だった。

「というか本番前なのにバイトしてんのか？」

「どこでやるんだ？」

「ああ、駅前の喫茶店」

「わかった。気が向いたら行くよ」

そう言っただけ俺は雑誌コーナーで立ち読みを始めた。数分して、巽は客が来ないのいいことに自身も立ち読みを始めた。

もはや注意する気にもなれず、そのままにして俺は立ち読みを続けた。

それがいけなかった。俺と巽はトラックが接近しているのに気付かなかった。暴走したトラックは店に突っ込み、雑誌の棚ごと俺たちを吹き飛ばした。俺は受身を取る事も出来ずに、頭を強くぶつけて気を失った。いや、意識不明に陥った。そして、おそらく病院に搬送された後に死んだのだろう。そこら辺のところはよくわからない。

なぜなら、気付くとそこはもう自分の知る世界ではなかったからだ。

空は雷雲が立ち込めているときより、夜の空より真っ黒で、青白い球体が浮かんでいて、それが世界を照らしていた。

起き上がって見ると、橋の架かった川があった。河原では子供たちが江戸時代に着ていた様な着物でみんな石を積んで遊んでいる。

子供たちの声が聞こえてきた。

『一つ積んでは父のため・・・、二つ積んでは母のため・・・、三つ積んでは兄弟の・・・』

誰が一番高く積めるか競争するかのごとくに一生懸命積んでいる。やがてみんな飽きたのか、鬼ごっこをし始めたようだ。そこへ、顔が真っ赤で角が生えた人型の生物がやってきた。（トラ柄ではなく普通の着物着ていた）

『赤鬼さん、こんにちわ』

『はい、こんにちわ。時間には浄土へ帰るんだよ？』

赤鬼は風貌とは裏腹に、優しい態度で子供たちに接していた。

「本物の赤鬼？ここは死後の世界なのか？」

こちらに気付いたのか、赤鬼が近づいてきた。

『狐宮龍弥殿ですね？』

「はい、そうですか？」

俺は立ち上がりながら答えた。

『お待ちしておりました。こちらへどうぞ』

赤鬼は先導しようと歩き出した。俺は一つだけ聞いた。

「確認なんですが、ここはあの世ですか？」

自分でもうすうす感じていたが、確認せずにはいられなかった。

『そういう言い方をされる方もいますね。そうです。ここはあの世ですよ。そして、正確には霊界と言います。では、こちらへ』

再び歩き出す赤鬼さん。俺もそれを追って歩き出した。

歩いている途中で、赤鬼さんが話しかけてきた。

『ただ歩いてるのも退屈ですし、霊界の説明でもいたしましょうか？』

「はい、お願いします」

「しかし、鬼って見かけによらず、ていねいなしゃべり方だな

『まず、最初にあなたがいた場所ですが、あそこは三途の川です』

「現世と霊界をつなげてるっていう川ですよね」

『現世ではそのようなことになっていますが、実は違っんです。あそこは修羅界と霊界の境なんです』

「・・・修羅界ってなんですか？」

修羅界なんて生きているうちは聞いたことがなかった。

『知らないのも無理はありませんね、マイナーですし。修羅界というのは修羅と呼ばれる者達が戦い続けている闘技場のあるところです。現世では古代ローマのコロッセオのような場所ですね。』

「コロッセオのような場所ということは、誰かが観戦したりするんですか？」

『いいえ、修羅たちには理性がなく、危険すぎるのでほとんど誰も近づきません』

「ほとんど？見に行く方もいるんですか？」

『はい。月に一度、毘沙門天様が視察に行かれますし、修羅界の長である阿修羅様はいつも観戦しています』

「毘沙門天？阿修羅？」

「もう何がなにやら、ちんぷんかんぷんだ。」

『毘沙門天様と阿修羅様は霊界の守護神です。毘沙門天様は七福神としても知られていますよ』

「ああ、分りました」

『じゃあ、話を続けますね。』

赤鬼さんからその後も色々と言明を受けているうちに、閻魔大王の城にたどり着いた。

第五話：試練その1

赤鬼さんと俺は閻魔大王の城、閻魔城に入って廊下を進んで行く。城内は外と違ってかなり明るかったが、かなり質素な感じであった。

『ここは、仕事場もかねておりますから』

気持ちを察してか赤鬼さんが説明してくれる。

「じゃあ、ここで地獄行きか天国行きか決まるんですね」

『ええ、そうなりますね』

どンドン歩いていくと『審判室』という部屋があり、何人？かの霊が並んでいた。

「結構並んでますね」

『いえ、狐宮殿はこちらへ』

「え？ここで・・・」

『狐宮殿は特別なのです。ささ、こちらへ・・・』

- 俺が特別？一体どういうことだ？

赤鬼さんについて行くと今度は『執務室』と書かれた部屋の前にやってきた。

『さ、お入りください』

「わかりました。失礼します」

赤鬼さんがドアを開け、俺は中に入った。

- 会社のような場所だな

執務室の中は数十のデスクが並びスーツを着た人？がモニターを見ながら、何かを書いている。

「あの、ここは？」

『死んだ人々がどのような人生を歩んできたかを見ているんです。それを報告書にまとめて閻魔様に渡し、それを基に閻魔様は天国行きか、地獄行きか決めるわけです。』

「でも、僕は何でこんな所に連れて来られたんでしょうか？」

『もうすぐ分かりますよ』

そう言いながら、さらに奥へと進んでいく赤鬼さん。仕方なくついて行くと『特別調査室』という部屋の前にやってきた。ここが目的の場所のようだ。

赤鬼さんがドアを開けて、僕を促す。俺が中に入ると、最後に一言声をかけてきた。

『がんばってください』

そしてドアが閉められた。

「死んでるのに『がんばってください』って・・・

訳が分からなかったが、とりあえず部屋を見回してみる。

どこことなく、学校の校長室に似ている場所だった。

ただ一つ違うのは、机が二人分あることだった。

「ようこそ。狐宮龍弥殿」

いきなり後ろから声をかけられ、全く気配がなかった事に少し驚いて振り向くと、顔に龍をイメージしたかのような刺青のある男と九本の尾がはえた美女が立っていた。

「あなた達は？」

「これは失敬。私は霊界の守護神である龍王難陀。こちらは九尾玉藻」

「よろしく！」

青の男、龍王が丁寧なのに対し、美女、九尾の方はなれなれしい感じだった。

「俺は閻魔大王の審判を受けるんじゃないんですか？」

「貴方にはまだ生き返るチャンスがある。ゆえに審判はまだ受けなくてもいいんです」

「俺が生き返れる？本当なのか？」

思わず俺は龍王に詰め寄った。

「落ち着きなさいよ。チャンスがあると言っただけで生き返れると決まったわけでは無いわ」

さっきとは打って変わって、冷たい感じで九尾が

「俺は何をすれば良い？教えてくれ」

俺は九尾の目を見ながら聞いた。

「・・・あなたがするべきことは二つ。一つは私たちが出す試練をクリアすること、二つ目は私たちと契約すること」

「契約？」

九尾が顔を近づけてくる。俺も目をそらさずに見返す。

「そう、契約。生き返っても、地獄に行った方が楽なんじゃないかなと思うようなね。ま、試練をクリア出来なきゃどうにもならないけど」

かなり挑発的な九尾。

「やってやるよ。生き返れるならどんなことでも！」

「俺は約束したんだ。あいつらの分も生きると・・・」

「狐宮殿、試練も契約も選択するのはあなたの自由だ。しかし、どちらもかなり厳しい道です。このまま死んだままなら、あなたは確実に・・・」

俺は笑顔で龍王に言う。

「たとえ修羅の道だとしても、俺は生き返りたい、いや、生き返らなくてはならないんです。だから俺は・・・」

「第一試練ごーかくー！オメデトーー！」

「は？」

俺はさぞかしマヌケな顔をしていることだろう。

「でも、仕方ないよな。」

「なんと！今のが君の心を試す最初の試練だったのです！」

「はあ」

「九尾さんキャラ変わり過ぎでしょ！」

龍王さんが申し訳なさそうに話し掛けてきた。

「騙すような形になってすまない。だが、こうでもしないと感づかれそうだったからね。それと、早速第二の試練に移りたいのだが・・・」

「」

「はい。お願いします」

「ここから先が本当の試練だ。覚悟はいいかね？」

「はい！」

「そうか、では・・・」

龍王さんが手をかざすと、どこからともなく漆黒の扉が現れた。

第六話：試練その2

俺は暗闇、いや、暗黒の中を歩いている。そこは光が全くなく、何も見えない、自分がこの暗黒の一部で、本当は存在していないんじゃないかという感覚さえる。本当に進めているかどうかもわからない、そんな中、俺はひたすら出口を目指して歩いている。『絶対に生き返る』その思いだけが俺を支えている。

龍王さんは漆黒の扉を指しながら、第二の試練を説明してくれた。
「第二の試練は、この扉から続く道を通して最後の試練の会場まで向かってもらう」

「たったそれだけですか？」

「ああ、それだけだ」

「・・・わかりました」

何か裏がありそうな感じがしたが、龍王さんの表情からは何も読み取れなかった。

「それじゃあ、第二のシレン！闇の道、いってみよう！」

そう言くと、俺に向かつてしきりにウインクしてくる九尾さん。

「俺に一体何を求めているんだ？」

「んもつ、そこはやってみようだよ。狐宮君！」

シリアスな雰囲気ぶち壊しの一言だった。

龍王さんは、引きつった笑顔になり、青筋を立てていた。

「九尾、貴様！真面目にやれ！真面目に！」

「ええー？私はこれでも充分マジメにやってるよ？」

「てめえ、本当に燃やされてえのか？ああ？」

堪忍袋の緒が切れたのか、龍王さんの口調は滅茶苦茶荒れていた。
「上等よ！やれるもんならやってみろつてのよ！」

「言ったな？覚悟しやがれ！」

売り言葉に買い言葉、とたんにけんかが始まった。二人はもうすでに人間の姿ではなく、龍と狐になっていた。これが本来の姿なのだろう。

俺は呆れてしまつて、さつさと扉を開けて第二の試練を始めた。

・龍王のやつ、本気ね。いいわ、こつちも本気でつて、何で私視点なのかしら？まあ、いいか、とりあえず今はこいつを倒す！

龍王の目が赤く光り、咆哮するとあちこちから火柱が上がる。私はそれをかわしながら、九本の尻尾のうちの一本を竜巻に変え、龍王に放つ。

「龍が竜巻をくらうなんて、滑稽ね」

私が言い放った言葉を歯牙にもかけず、龍王は目を青くして咆哮し、竜巻を凍りつかせ、自らの爪で粉碎する。

私はその隙について無数の槍に変化させた尾で龍王の胴を一突きにするが感触がない。たちまち霧のように消えてしまった。

「ふん！どこを見ている」

龍王の言葉に気づくと同時に、私の体が氷結し、動けなくなる。

・しまった！龍王の策にまんまとはまってしまったみたい・・・、なーんてね。

「今謝れば許してやらんこともないぞ」

龍王は余裕しゃくしゃくだ。

「どうした？早く謝れよ？」

・ふん、あんたの敗因は、それを私だと思ったことよ。

龍王の背後から、不意打ちをかける。と同時に自分自身に変化させた氷結した尾を自爆させる。無数の氷の破片が龍王に向かって襲い掛かる。

・これなら！

しかし、龍王は一枚上手なようで、私の攻撃も氷の破片も龍王の

光の障壁に阻まれてしまった。

「ふん、貴様の考えなどお見通しだ！」

「くっ！」

戦況は圧倒的に不利だった。相手は全くの無傷、私のほうは九本の尾のうち、二本を失ってしまった。

・こうなったら・・・

私は覚悟を決めた。全身の靈力を牙と脚に集中させる。龍王のほうもこれを最後の攻撃とすべく靈力を高めていた。そして、私たちが激突しようとしたまさにそのとき。

「なああああにやつとるんだあああ！きさまらあああああああああああ！」

激しい一喝に動きを止める私と龍王。

-や、
や
や
や
や
や
や
ばい！
！！
！！
！！
！！

特別調査室の入り口には、私達の上司、閻魔大王が仁王立ちしていた。

*
*
*

-俺はもうだめなのか？

見えない出口に諦めかけた時、葎花の顔がよぎった。

「あいつとも約束したじゃないか！俺はあいつのために……」

そう強く思ったとき、急に光が差ししてきた。あまりのまぶしさに目を瞑る。

目を開けると、そこは、ローマのコロッセオのようなところだった。

第六話：試練その2（後書き）

目の前には無数の修羅が牙を向く・・・。

第七話：試練その3

「何なんだよこいつらは？」

もう何十回目かの投げを決めて、修羅を地面に叩きつけ、首を折る。そして、俺はすぐさま走り去る。

しかし、何事もなかったかのように、立ち上がる修羅。そして、また俺を追いかけてくる。

「くそ！出口はどこだ！？」

行く手にもう一体修羅が現れ、棍棒を振りかざす。俺は相手の力を利用して投げを決め、後ろから追いかけてくる修羅にぶつける。
俺はまた走り出す。

30分前・・・

俺の目の前には、十体の人型の怪物がいた。その怪物たちは、血だらけで、目は白く、手には棍棒が握られていた。

『ようこそ、第三の試練会場へ・・・、契約する神もないのによく来たな』

声がどこからか聞こえてきた。俺は思わず声をもらした。

「第三の試練って、一体！？」

『逆鬼ごっこ。君の目の前にいる者達、修羅の攻撃から逃げつつ、この闘技場の出口を目指してもらおう。ただし、君から攻撃してもかまわんが・・・。早速はじめようか』

「ちよつと待て！この闘技場の地図とか無いのか！？」

『では、十秒待つ、逃げたまえ！』

「ええー！？完全無視！？・・・ええい！」

俺はすぐ後ろにあった扉から逃走を開始した。

「貴様ら一体何やってるんだ？」

一喝の後のその言葉を皮切りに、私と龍王は1時間にわたってお説教をくらった。

・辛かった！何でわざわざ人間に変化させて、しかも正座で一時間も、お説教なんかするのよ！あんのオヤジは！

「くっ、私としたことが・・・」

龍王はかなり反省しているようで・・・。

「こうなれば、切腹しかないか・・・」

私は呆れ顔で言う。

「・・・あんだ、あほね。あれくらいで切腹してたら私はどうなるのよ？第一、切腹なんて私達がやっても意味ないでしょ」

「気持ちの問題だ」

「あつそ、ホント馬鹿だと思わない？」

龍王が怪訝な顔で聞いてくる。

「お前、誰に話しかけているんだ？」

「誰って、狐宮君に決まってるじゃない！ってあれ？狐宮君の気配がないんだけど・・・」

「！」

「闇の道の試練の扉もない！」

「！！！！」

闇の道の試練の扉は、挑戦者が目的地に達すると、消える。つまり・・・。

「狐宮君、もう第三の試練会場に着いてる！どうしよー！」

「落ち着け！我々がいなければ、試練は開始されないはずだ」

「ドアホ！阿修羅の性格を考えてみなさいよ！」

「急ぐぞ！」

私達は真っ青になって修羅界の闘技場へ向かった。

俺は闘技場の一室に隠れていた。全身は傷だらけ、満身創痍とはまさにこのことだろう。そのかわり、運良く地図を手に入れ、闘技場の構造は大体把握できた。

- 問題は、修羅のほうか・・・。

あいつ等は、人間なら行動不能や、致命傷になる攻撃を受けても、数秒で回復してくる。

- 刀さえ有ればな、でも、真つ二つになっても蘇えったら、無意味だけど・・・。

『坊主！力が欲しいか？』

部屋の奥から男の声がする。

「誰だ！」

『ふははは、誰でもいいだろう？力が欲しいかって聞いてるんだよ』
「ああ、欲しいね。でも、あんたは怪しいからな、あんただけには頼まん」

『強がりと言っても、俺の力が無ければここから生きて出られんぜ』

- 生きて出るって、既に死んでるぞ・・・

「やってみなくちゃわかんないだろう？」

『いや、わかるね。お前さん、現世ではかなり強い部類に入るようだし、ここまでやって来たのも大したもんだ。そこは認めてやる。だがな・・・』

「わかってるさ、俺の技が全然通用しないのなんて。けど、ここで誰かに頼ったら、龍王さん達と契約した後やっていけないような感じがするんだ」

『ふははは、漢だねえ。気に入った。どうだい、坊主！俺をここから連れ出してくれねえか？』

「なんで俺がそんなことをしなきゃいけないんだ？」

『だから、連れ出してくれたら力を貸してやるって！』

「何度も同じ事を・・・」

『お前さん、約束があるんだろう？守りたいもんがあるんだろう？絶対に、生き返らなきゃならないんだろう？それによ、時には頼ることも必要だぜ？』

・全部お見通しか・・・

「あんた、ずるいな。そんな事言われたら、断れないだろうよ。いいよ、連れてつてやるよ！ただし・・・」

『わかってるさ。俺は約束は破らねえ』

「で、あんたどこにいるんだ？」

『おう、今出て行く』

すると奥から物体が猛スピードで飛んできた。俺はそれを手でキヤッチする。よく見てみると、黒い円盤だった。鎖で吊るされていて、首から掛けられるようになっていた。

「？」

『これが俺だ』

「うお！？円盤がしゃべった！？」

『おう、なんだ？円盤がしゃべっちゃいけない道理でもあるってえのか？』

「いや、普通は喋らねえよ」

『細かいこと気にするな！』

「・・・」

・ここじゃあ、現世での常識は一切通用しないってか？まあ、途中からわかってたけど・・・

『それじゃあ、ちやっちやといくか！坊主！』

「ちゃんと、狐宮龍弥っていう名前があるんだけど。まあ、この際いいか。」

『良くはねえな、親に貰った立派な名前じゃねえか。・・・狐宮の坊主でいいか？』

「いや、長いでしょ」

『それじゃあ、たっちゃん？』

「やめろ！坊主でいい。坊主で」

『そうかい？それじゃあ坊主、俺の名を呼びな！』

俺の頭に、直接名前が伝わってきた。

「ラグナロク！」

すると、円盤が俺の背丈と同じくらいの漆黒の両刃刀に変わった。

「すげー！」

俺が素直に感心していると、足音が近づいてきた。

『どうやら気づかれたな！行くぞ坊主！』

俺は扉を蹴破り、外に飛び出る。すぐそこまで、二体の修羅が迫っていた。俺は修羅達に肉迫し、ラグナロクを横薙ぎに一閃し、修羅達を真つ二つにする。

さすがに修羅といえども復活出来ないようで、動く気配はない。

「すごい切れ味だ！それに、大きさに反して軽い！」

俺は驚嘆した。現世においてこれほどまでの名刀はなかなか造れ無いのではないだろうか？

『どうだ、坊主？』

「ああ、すごいもんだな」

『そうかい？それじゃあ行くか？』

俺は、ラグナロクを円盤に戻し、首から掛けて、出口に向かった。

一方その頃、闘技場の一室では・・・

『阿修羅様！！大変でございます！！』

俺の使い魔が報告してくる。

「どうした？それと、試練の監視はどうした？」

『は！私が試練を監視していましたところ、挑戦者が宝物殿に忍び込んだのです！』

「別にかまわぬではないか。あそこには地図もあるし、この試練を乗り切るには、宝物殿で何か武器を見繕ったほうが有利だし、俺は何も盗むなとも言っておらん」

『しかし阿修羅様、持っていったのはよりもよって、「ラグナロク」なのです！』

「なんだと！」

『どうやら、彼は最上級霊力の持ち主のようで・・・』

「な、なんとということだ！」「ラグナロク」自身が主だと認めたというのか！？」

『そうとしか言いようがありません・・・』

俺は真っ青になりながら、指示を出す。

「今、彼はどこにいる？」

『霊力探知によると、今、第三階層です。』

「わかった！全ての修羅を下がらせる！私がじきじきに奪い返す！あれは、外に出てはならぬ物なのだ！もし、私が失敗したら、解っているな？」

『承知いたしております』

俺は、出口付近の第一闘技場へ向かう。出口へ向かうには、絶対避けられない道だからだ。

- 私の命に代えても、必ずあれは取り戻す！

二体の修羅を倒した後は、修羅が全く現れなくなった。とりあえず、進むのは楽になったが、嫌な予感がしていた。

『おい、坊主。道はあつてるか？』

ラグナロクが話しかけてくる。

「何回も聞くなよ。もうそろそろ、出口付近にある第一闘技場つてところで、そこを過ぎたら出口だよ。」

『そうかい。いやあ、久しぶりの外か、楽しみだねえ』

「なあ、外に出たらあんたは何したいんだ？」

俺はなんとなく聞いてみた。

『いろんな物を見てえな。色々と変わってるんだろぅなあ』

「あんたさ、一体何年くらいあそこにいたんだ？」

『なげえこといたのは確かだが・・・、忘れちゃった！』

「ふーん、そうか」

『それだけか？』

「別に、興味ねえよ。あんたの過去になんか」

『そうかよ。それとな坊主。いい加減「あんた」呼ばわりはやめろ』

「うーんそうだな。そんなじゃあ、ラグナロク！」

剣になるラグナロク。

「いちいち剣になるなよ！」

俺は円盤に戻しながら言った。

『仕方ねえだろ！違うのにしてくれい！』

「・・・んじゃあ、ロクさんでどうだ」

『シンプルでいいねえ。よし、それにしてくれ！』

そうしているうちに、俺達は第一闘技場に着いた。

「待っていたよ。狐宮君。」

俺達の目の前には、美しい顔をした男が立っていた。普通と違うのは、通常耳があるところも顔の正面になっている。つまり三面あり、さらに、腕が六本ある。六つの手にはそれぞれ武器が握られていた。

・この声、聞き覚えが・・・

「はじめましては変かな？一応自己紹介しておくが修羅界の統治者、阿修羅だ！」

「あ！思い出した！あんた、最初に俺を無視したろ！それにお前の最初の口ぶりからすると、本当はこの試練、俺と契約するはずの龍王と九尾が到着してから、始めなきゃいけなかったんじゃねえか？」

「ふん、そんな事など、どうでもいい」

「どうでもよくねえ！」

「どうでもいいのだよ。それより狐宮君、取引きといこうか」

俺は苛立ちをあらわにしながら答える。

「取引き？」

「君が持っているその円盤、それを渡してくれ。そうすればこの試験クリアしよう」

「いやだね」

「そのの代わりも用意する」

「俺は約束したんだ。外に連れて行ってやるって」

「いい加減にしろ！お前はそれの力を知らんから・・・」

「力？剣に変化する能力だろ？」

「違う！それだけでは・・・」

「ええい、うるせえなあ！取引は決裂してんだよ！ラグナロク！」

俺はラグナロクで居合いの構えを取り、臨戦態勢にはいる。

・手数は相手のほうが上！ならば、一撃で決める！

「まったく、穩便に済ませればよかったものを！」

阿修羅も臨戦態勢に入る。

『阿修羅はかなりの強者だぜ』

「ああ、みたいだな、だけど、負ける気はしない。」

『そうか・・・で、何で動かねえんだ？』

「そういう構えなの！ちよつと黙ってくれ、集中したいんだ。」

『はいはい。』

俺は阿修羅のみに集中する。全身の全ての感覚を研ぎ澄ます。

何分もの間、俺と阿修羅はにらみ合っていた。

痺れを切らしたのか、阿修羅が突進してきた。

阿修羅の攻撃が届くか届かないかという距離で、俺は身体を半回転させ、その勢いに乗せて、ラグナロクで横薙ぎにする。

阿修羅と俺の体が交錯し、かなりの距離を置いて背を向け合って立っている。

俺の頬には一つの傷がつき、血が流れている。

ドサ！

阿修羅は倒れた。

「無天一流居合、半月の型。本来なら傷一つ負わないはずだったの

「にな。大したもんだよ。」

『やったな！坊主！』

「いや、まだまだよ。ロクさん」

目の前には、無数の修羅達がいた。

「まったく、こっちは全力出しきって、殆ど動けないってのに・・・」

「

『おいおい！』

「すまねえ、ちょっと無理っばいかも・・・」

『まったく！俺の力を貸してやる！それでどうにかしろ！』

頭の中に力の使い方が流れこんでくる。

「これは！でも、今は迷ってる場合じゃない。

目の前の修羅達がこちらに詰め寄ってきていた。

俺はイメージした。強く、強く、そして、ラグナロクを大上段で

構え、振り下ろすと同時に言い放つ！

「きえるーーーーー！」

すると一瞬にして、目の前の修羅達は、消え去った。文字通り跡形もなく消えたのである。

俺は阿修羅の言っていたことがようやく解った。

「この武器は、危険すぎる！」

『大丈夫か？』

「ああ」

「約束は約束だからな。連れて行かないと、外へ・・・」

俺はラグナロクを杖代わりにして、出口から外へ出た。

「狐宮殿！」

「狐宮くーん！」

龍王と九尾の声がした。俺はほっとして、そして、意識を失った。

第八話：契約

どのくらい意識を失っていたのだろう。目覚めると、俺は病室の様な場所のベッドで寝ていた。確信が持てないのは、ここが霊界か、現世なのかわからないからだ。

「お気づきになりました？」

真っ白な着物に、人なんかよりずっと白い肌をした、女性が俺に問いかけてくる。

「あの、ここは？」

「ここは、閻魔城医務室です。ちょっと待っててくださいね。今、龍王様と九尾様をお呼び致しますので。」

そう言つと、その女性は医務室から出て行つた。それにしても、死んだ後にまで医者にかかるとは思わなかった。

しばらく待っていると、龍王さんと九尾がやってきた。

「ダイジョーブー!?」

九尾がいきなり、ダイブしてきた。

「デジャビュ!? 九尾てめえ、いい度胸してるじゃねえか！」

「狐宮殿、落ち着いて下さい！」

俺はすごく怖い顔をしていたのか、必死でなだめてくる龍王さん。

「落ち着け、俺！」

俺は深呼吸をする。

「いい香りでしょう。アロマテラピーの効果がある香水塗ったんだ

ー！」

俺は九尾を完全無視して、話を進める。

「俺は、合格したんでしょうか」

「もちろん、合格だよ」

龍王さんは、まじめに返してくれた。俺はほっとして言う。

「よかった。俺は生き返れるんですね」

「ちよっ・・・」

「ええ」

「あのひとついいですか？」

「何ですか、狐宮殿？」

「無視しないで！」

それでも無視して、話を進める俺と龍王さん。

「龍王さんはいいとして、九尾とも契約をしなくてはいけないんですか？」

「残念ながら。申し訳ない」

真剣な表情で謝罪する龍王さん。

・本当に誠実だなあ

「ちよつと待つてよ！私じゃ不満なの？」

俺は真剣な表情で答える。

「不満だよ。九尾、お前は話の流れは読まないし、性格めちゃくちゃ不安定じゃねえか。多重人格かなんかか？」

「う！何でそれを・・・ってそんなわけあるか！」

「それじゃさ、少しは、話の流れとか、場の雰囲気とか読んで？」

「あのねえ、私だって考えた上で・・・、なによ？」

俺はじと目で九尾を見ながら、質問した。

「この部屋はどこでしょう？」

「は？医務室よ。医務室。」

「それじゃ、俺は？」

「狐宮龍弥？」

「何で疑問形なんだ？それにはずれ」

「うーん、患者・・・」

「そう、患者。その患者にお前は何をした？」

「・・・ごめんなさい」

俺はため息をつきながら言った。

「はあ。九尾、現世の俺の周りにはお前のようなやつが、もう2人もいるんだよ。これ以上負担が増えると・・・」

「わかったわよ。もう、ふざけないわよ。」

いじけてしまう九尾。

「極端だな。だから、場の雰囲気と話の流れさえ壊さなければ、ギヤグに走ってもいいから」

ぱーっと、顔を明るくする九尾。

「いいの？本当に、いいの？」

「いいけど。場の・・・」

「わーい！ありがとう！」

はしゃぎまくる九尾。俺は、下を向き、ガクツと肩を落とす。

・九尾、こりゃわかってないな。さらば、俺の平和な日々・・・

「自信は無いが、私もサポートするから、そんなに絶望しないでくれ」

・それが心配なんですけど・・・

龍王さんが暴走を見た後なので、心配せずにいられない。

俺は話題を変えた。

「それで、契約はいつすればいいんですか？」

「ん？もう終わってるよ」

九尾がきょとんとして言う。

「へえ、もう終わってるんですか・・・って、えー！？」

「君が寝ている間に終わらしたのだ！」

九尾はやけにハイテンションだ。

「どど、ということですか？」

俺は龍王さんに問いたです。龍王さんは、またもや申し訳なさそうにしながら話してくれた。

「狐宮殿、本来ならあなたが起きてから契約のはずだったのですが、全然起きる気配が無く、しかも、契約を出来る時間を過ぎてしまいそうでしたので、契約の意味もちゃんとあったことですし、契約させていただきました。」

「契約の方法って？」

龍王さんが、点滴のパックを指差しながら言う。

「輸血です。私の血液と九尾の血液をあなたに輸血しました。それ

が契約です。契約のしるしとしてあなたの右腕には、狐を模した紋章が、あなたの目には薄っすらと龍の文字が入っているはずです」

右腕を見てみると、確かに刺青のようなものがあり、差し出された鏡を見ると右目に薄っすらと龍の文字が見える。

「その紋章と龍の文字は現世では、靈感の強い人以外見えませんか
らお気になさらないで下さい」

俺は無理矢理自分自身を納得させることにした。契約しなくては
生き返れないんだから・・・。

「それじゃ、これから現世に戻ろう！」

九尾はハイテンションで言うと、俺の手をつかみ、猛スピードで
走っていく、途中で、閻魔城で働いている鬼の何体かにぶつかりそ
うになった。医務室の一言で完全に舞い上がっているらしい。

九尾はある部屋に入るとようやく止まった。龍王さんが少し続い
て部屋に入ってくる。

「待っていたよ。狐宮君」

野太い声で呼びかけてきたのは真っ赤な顔の髭をはやした大男だ
った。

「閻魔様、お待たせいたしました」

龍王さんが、深々と礼をしている。俺もつられて礼をする。どう
やらこの男が閻魔大王らしい。

- 人のよさそうな笑顔だ。本当に閻魔大王なのか？

第九話：審議、そして蘇生

狐宮龍弥が意識不明になり、医務室に運ばれてから1時間後、閻魔城の一室で会議が始まった。霊界の重鎮達が軒を連ねるその会議は、霊界が危機にさらされたときに召集されるものだ。

出席者達が円卓につき、重苦しい雰囲気の中で会議は始まった。今回の議題は、狐宮龍弥とラグナロクの処遇についてだった。

閻魔大王が険しい表情で話し始めた。

「最初に経緯を説明しておきます。今回、まことに遺憾ながら、こちらの不手際で契約適格者と阿修羅が戦い、阿修羅は重傷、適格者は軽傷ですが意識不明となってしまう事態に陥りました。さらに、適格者はラグナロクを解放し、その上、ラグナロクと契約を交わしたのです。このまま、龍王難陀及び九尾玉藻と契約をさせ、現世に生き返らせていいかどうか、ご審議のほどお願いいたします」

沈黙が場を支配した。阿修羅と適格者が戦ったこともだが、適格者が軽傷で済んでいることなど前代未聞であったし、ラグナロクは神々を黄昏へと導くほど強力な武器で、それが人と契約を結ぶなど考えられない事だったからだ。

沈黙を破って、一人の出席者が発言する。天界の長、帝釈天であった。

「阿修羅と適格者が戦ってしまったのは、完全に我等神々の不手際だ。特に、その適格者と契約をするはずだった龍王難陀と九尾玉藻のな。さらに、阿修羅もわざと、難陀と玉藻を待たずに、第三の試練を始めた。阿修羅が重傷を負ったのは自業自得だといしか言いようが無い。それに、阿修羅を倒すほどの実力者なら、契約者としても申し分ないのではないかね？」

場がざわざわし始める。納得の声やいささか難色を示す声が飛び交う。出席者を代表するように、一人が発言する。天界宝物殿守護の毘沙門天であった。

「確かに、適格者への責任追及はお門違いもいいところだろう。しかし、ラグナロクの件は別だ。解放しただけならまだしも、彼は契約を結んでいるんだぞ。ラグナロクが現世に出れば、どうなることが解った物ではない」

帝釈天は不敵に笑いながら、答える。

「我らも契約を復活させ、現世で監視すればよい。」

「しかし！」

「大丈夫だよ。龍王と九尾もついているんだぞ？」

毘沙門天は黙り込み、何かを思案しているようだ。帝釈天はさらに付け加える。

「心配性だな。なら、もう一つ俺が安全だと踏んでいる理由を言おう。それはな・・・」

それを聞くと、毘沙門天だけでなく、出席者全員が納得したようだ。閻魔大王がこれまでの議論をまとめ、採決をとる。

「では、狐宮龍弥はラグナロクと契約させたまま、龍王難陀、九尾玉藻両名と契約させた後、現世へと返す。龍王難陀、九尾玉藻はこの為、今回に限り責任は不問とする。阿修羅もすでに一定の制裁を受けたものとして、不問とする。帝釈天、毘沙門天は契約を復活させ、現世にて監視を行う。これらの結論でよろしい者は拳手をお願いする」

出席者全員が拳手し、全会一致で可決となった。

「それではこれで閉会する。」

閻魔様は会議のことを話してくれた後、謝罪をしてくれた。

「今回は、私の監督不行き届きで大変な目にあわせて、本当に申し訳ない」

深々とお辞儀をする閻魔様。霊界の審判者の威厳はどこにも無い。「とんでもない、俺も勝手に先に進んでしまったんですから。お互

い様です」

俺は軽い口調で言った。閻魔様は、顔を上げるとふうつとため息をついた。かなり気苦労が多いのだろう。

閻魔様は着物の袖から何かを取り出し、俺に差し出した。それは見覚えのある円盤、もといたグナロクだった。閻魔様は真面目顔で、グナロクの扱いについて話し始めた。

「先程の話の通り、これはあなたが持つ事になりました。しかし、あなたもご存知の通り、これは大変危険な武器です。全く使うなどは言いませんが、極力使用は避けてください。」

俺は静かにうなづく。こんなものがあると知れたら、世界は大変なことになるだろう。俺は絶対に使うまいと心に誓って、グナロクを受け取った。

「それでは」

そう言って閻魔様は席を立った。部屋を出た閻魔様と入れ替わりに、龍王さんと九尾が入ってきた。

「いやあ、やっぱりあのオヤジが落ち込んでるのを見ると、せいせいするわ！これで説教も減ればいいんだけど・・・」

九尾がいきなりとんでもないことを言ってきた。ハイテンションの原因はそれらしい。俺は思わず口を出す。

「ちよつと待て。誰のせいだと思ってるんだ？」

「確かに、私も悪いわよ？狐宮君には謝るけど、あのオヤジには申し訳なさなんか感じてないわ。だいたい、一時間も説教しなけりゃ、こんなことにはなつてないんだから！」

俺は二の句が告げなかった。

・こいつ自分のこと棚に上げすぎ。

さらに、九尾の責任転嫁は龍王さんにも及んだ。

「龍ちゃんだって、大人気なく怒ったりしたしね」

龍王さんはうんざりしたような、疲れたような顔で切り返す。

「それはすまなかった。誰かのせいで寝不足だったのな」

「あれは、あんたが何回も報告書のやり直しをさせるから・・・」

「自覚はあるようだな」

龍王さんと俺の視線が痛かったのか、そっぽを向く九尾。俺は、このやり取りを聞く限り、やっぱり九尾が全ての元凶のように思えてならなかった。

「現世では、こういうことはやめてくれよ」

俺は、生き返った後のことを考えて、九尾に釘をさした。

「わかってるわよ」

やけに、素直に応じる九尾。疑問は龍王さんの一言で解消した。

「お前、自分好みの男だと、見境無いな・・・」

「そうなのか？」

俺は完全にあきれながら九尾に聞く。

「こいつの思考構造はどうなっているんだろう？」

「いいじゃない、私の勝手でしょ」

龍王さんはこれ以上言っても無駄だと判断したのか、この話題を終わらせ、本題に入ることにしたようだ。

「それで狐宮殿、これから蘇生に入るのだが、その前に契約の内容を教えておこう。悪霊はわかるかい？」

「まあ、なんとなくですけど」

「動物でも、人でもだが、なにか恨みをもっていたり、現世に対する未練が強いと現世で、なんらかの影響を及ぼし始めるんだが、悪い影響を及ぼすのが、悪霊なんだ。そして、悪霊が妖怪や動物に取り付くと、理性が吹き飛び、暴走を始め、人を襲う。まあ、かなりまれなケースなんだが、最近、徐々にではあるが増えていつている。」

「にわかには信じがたい説明かも知れないが、これまでのことを考え、俺は信じることにした。龍王さんは先を続ける。」

「妖怪達から悪霊を落として、暴走を止めるのは霊界の仕事なのだが、手に負えなくなってきた。そこで、現世で霊力が高い人物に協力してもらっているという訳だ」

「わかりました。妖怪から悪霊を落とす時に龍王さんと九尾の力を

借りれると」

「能力自体は、常時発動可能だが、できるだけ使わないでほしい」

「確かに、現世に影響が出ますからね。使う気はありませんよ」

「狐宮殿は、物分りがよくて助かります」

実際、俺は能力を使う気は無かった。限定的とはいえ、人の限界を超えた力を行使するということは、体への負担が計り知れないからだ。

「詳しく能力の説明をしておく・・・」

龍王さんは次に、自分たちの能力を説明してくれた。

簡単に言うと、龍王さんの能力は、火や氷を操る能力で、九尾の能力は身体能力の向上・身体強化と尾を武器等に変化させる能力だそうだ。

「能力の使い方は、実戦で説明しよう。阿修羅を倒したほどだから、たぶん大丈夫だろう？」

「ええ、まあ」

・実際、ロクさんのお陰なんだけどね

『おう、よくわかってるじゃねえか。現世でもよろしくな』

・にぎやかになりそうだな、いろんな意味で・・・

「狐宮くん？なにばーつとしてのの？行くよ？」

九尾が怪訝な声で聞いてくる。どうやらロクさんの声は、俺にか聞こえないらしい。龍王さんは先に部屋を出たようだ。

「いや、なんでもないよ。案内よろしく！」

「うん・・・」

九尾は納得いつていない様で、しぶしぶ歩き出す。

たどり着いた部屋に入ると、門があった。先に着いていた龍王さんが説明を始める。

「『時戻しの門』、これで、狐宮殿は事故のまさに起こる瞬間、別の場所に転送されます」

「同時に、俺が二人いることになるんじゃないか・・・」

俺は、不安な顔をしながら言った。

「大丈夫だよ。狐宮君は、生身の体のまま、ここに転送されたんだから」

「？」

九尾の説明を聞いて、さらにわけがわからなくなった。

「ああ、つまりだね・・・」

龍王さんの説明によると、事故の瞬間に俺は生身のまま霊界に転送されたらしい。そのショックで意識が飛び、死んだと錯覚していたのだそうだ。しかし、俺が契約をしなければ、そのまま死んで、体だけが、事故現場に戻されることになっていたということだった。

「まあ、現世にいない時点で、死んだも同じだけどな」

何はともあれ、俺は生き返れることになった。門が開く、俺は光に包まれた。

俺は駅前に立っていた。服装は事故のときのままだ。

「戻ってきたんだな、俺は」

「そうだよ。どう感想は？」

九尾が俺の脳に直接話しかけてきた。九尾の姿を探すと小さい狐になっていて宙に浮いている。その隣には、これまた小さな龍になった龍王さんが浮いている。どちらもどこかのマスコットのようだ。俺も思念で答える。

「ああ、うれしいかな？でも、何日も霊界にいたって感じもしないから、そこまで感動したって感じでもないな」

「ふーん、狐宮君気絶してたもんね」

龍王さんが九尾のほうを向いていさめるような感覚で言った。

「誰のせいだと思ってるんだ？」

九尾は、うんざりした感じだ。

「ユーモアよ、ユーモア。」

「俺ももう気にしてないですから、龍王さんも気にしないでくださ

い」

『ほーら見なさい!』

九尾は得意満面だった。

『おう、坊主!俺を首に掛ける』

今度はロクさんの声がする。ポケットを探るとラグナロクが入っていた。俺は、言われたとおりに、首から掛ける。

『久しぶりだねえ。ずいぶんと変わってやがる』

ロクさんは感慨深げだ。

『あんた誰?』

『俺か?俺はロク、ラグナロクだ。よろしくな』

『ひつ、神々の黄昏!?』

『怖がることねえだろ?何もしねえよ』

ロクさんは、怖がられたことが気に食わないらしい。俺はしょうがないと思っただ。

『坊主、しょうがなくては無いだろ』

つつぬけだった。

『あの、皆さん?俺の心は丸見えですか?』

『ああ、今はね、精神リンクを切れば、心は読めないが、話をするときに切つてると、狐宮殿が一人で話すという風に見えますよ?』

龍王さんが説明してくれて納得した。それに、精神リンクしている時はロクさんの声も皆聞こえるようだ。

『説得力があるからね!』

突っ込まれる前に、言っておいた。

『私には説得力がないって!?』

『俺には説得力がないって!?』

頭がくらくとした。脳がオーバーロードしたようだ。

『思念を強くしすぎだろ。もっと抑えてくれよ』

俺はじと目で九尾をにらみながら訴える。

『何で私だけ?』

『だって、ロクさんはにらめないじゃないか。自分の胸元にらむな』

「んてできるか？」

「確かにできない・・・」

俺は、したり顔で先を続けようとした。その時・・・

「お待たせ、ごめん、遅刻だね。」

振り向くと、葎夏がいた。

「デートの約束だったんだよね」

「大丈夫だよ。って葎夏どうした？」

葎夏は俺の後ろを見て、啞然としている。後ろを振り向いてみる

が龍王さんと九尾が浮いているだけだ。

「なに、そのちっちゃい龍と狐は！？」

「・・・はい？」

「何で見てるんだー！？」

生き返るなりトラブルの予感がぶんぶんだった。

第十話：土蜘蛛その1（前書き）

お待たせしましたという割には短いですが、このごろ風邪気味だったので、お許しください。

第十話：土蜘蛛その1

どーも！九尾です！

今、私は大変な場面に遭遇しています。霊界での試練を何とかクリアして現世に帰ってきた狐宮君なんだけど、なぜかその彼女さんに私達の姿が見えているのです！

ありえない！ありえないよお！私達の姿は優秀な霊能者にだって滅多に見れないようにしてるのに！

『なぜ、見えてるんだ！？』

龍王も驚愕しております。というかパニックです。

狐宮君は冷静に打開しようとしてます。がんばれ、狐宮君！

『何も見えないんだけど……。目の錯覚じゃないか？』

『そんなことは……。』

そう言いながら目をこする葎花ちゃん。

『よし、今のうちだ』

ナンちゃんと言うが早いか、完全に姿を消してしまった。それにならって私も姿を消す。

『あれ？確かにいない。龍弥の言うとおり、目の錯覚かな？』

『そうだと思うよ。昨日は良く寝られた？』

『それが、あんまり……。』

『寝不足のせいかな。とりあえずコーヒーでも飲んで、目を覚ますか。いつもの茶店でいいよな？』

『うん！』

狐宮君とその彼女、葎花ちゃんは喫茶店に向かいます。私達の姿は今度は完璧に見えていないらしいです。狐宮君の冷静な処理で何とかこまかせたよ。

『ふう、どうにかこまかせたようだな』

龍王もほっとしております。

『でも、何で見えたんだろう？』

『彼女には先天的な何かがあるような感じがするが・・・』

『生まれもって靈感が強いとか？』

『いや、もっと強い何かがあるような気もするが、確証が持てん。私の勘違いかもしれないな』

『気になるじゃない。言いなさいよ！』

『神の生まれ変わりとか・・・』

『何？神の生まれ変わり？あははははは！そりゃありえないって！大体、観察してるときにわかるでしょうよ！』

『それもそうだな、忘れてくれ』

そんなやり取りをしながら狐宮君達の後をついていくと、一軒のレトロな喫茶店があつて、狐宮君と律夏ちゃんはそこに入っていきます。

律夏ちゃんにあまり近づかないほうがいいと思い、私達は外で待つていることにしました。少しして、数人の若い男女がやってきて、喫茶店に入りました。その頭上には見覚えのある姿が私達と同じ状態になって宙に浮かんでいます。私達を見つけ、近づいてきました。

それと同時に、喫茶店の中に入った狐宮君の叫び声が響きました。私と龍王はとんでもない説明忘れをしていたのでした。

『てへ』

『てへ、じゃないだろ・・・』

ナンちゃんの突っ込みはともかく、最後に狐宮君の叫びをどうぞ！
「なんで、生きてるんだよ！？」

第十話：土蜘蛛その1（後書き）

更新ブログ始めました

http://blogs.yahoo.co.jp/eighteyes2007

第十一話：土蜘蛛その2

九尾と龍王さんが葎花に見えるという危機（？）を何とか脱していつも行っている喫茶店に向かった。

喫茶店に入ると、マスターがいつものように話しかけてきた。
「いらつしゃい。今日はデートですか？」

本当に現世に帰ってきたんだと改めて実感する。俺は笑顔で返した。

「ええ、そんなところです」

「飲み物はどうします？いつものでよろしいですか？」

席に着きながら、俺は注文した。

「俺はいつもので、葎夏はコーヒーで」

マスターは不思議そうに聞いてくる。

「コーヒーでいいのですか？いつもはミルクティーなのに」

葎夏は苦笑いしながら答える。

「実はちよつと寝不足でね。砂糖たっぷりをお願いします」

「はい、承りました」

マスターがコーヒーを入れ始めるといい香りが漂ってくる。

「なんか、いつもとちがうね」

「ん、そうかな？」

「いつもよりも楽しそうだよ。私は別にかまわないけど」

自分が感じている以上に、戻ってきたことの嬉しさが表面に出ているようだ。しかし、葎花はそんな事情は知らないわけで・・・。

「それに、朝なのに思考が普通じゃない？」

「どういう意味だ？」

「確かに、俺の寝起きはとても悪い、人間としてぶっ壊れることもある。でもね、で・も・ね、そんなの数分だけだよ！！」

俺が睨むと何を勘違いしたのかこんなことを言ってきた。

「そんなに見つめないで、恥ずかしい・・・」

「どうしたんだ葎花！？お前、そんな天然キャラだったか？」

「全くだな」

思わず口にした言葉に反応する奴がいたので、振り返ってみるとそこには巽がいた。

「何で生きてるんだよ！？」

俺以外の歴史がそのままだというなら、死んでいなくても巽がここにいる可能性はゼロのはずだ。というより、死んでいる可能性の方が高くないか？

「生きてちゃ悪いか！？」

「いや、悪いとかじゃなくて・・・」

説明するに出来ずに困る俺に、葎花が一言。

「なんだ、やっぱりいつも通りか」

「なんだ、寝起きか。それじゃ仕方ないな」

「お前らな・・・」

ニヤニヤ笑う二人を前に、俺が怒りを必死でこらえていると、マスターがコーヒーを持ってきてくれた。

「これでも飲んで落ち着いてください。それと巽君、ライブの準備はいいのですか？」

「あ、そうだった。そんじゃあマスターちょっと音響いじるよ」

「はい、どうぞ。期待してますよ」

「あ、二人とも！ライブ、１８時からだから、よろしくな！」

そう言つと、巽は音響をいじりに行ってしまった。葎夏は砂糖たっぷりのはずのコーヒーを一口飲んで、しきりにマスターの腕をほめている。でも、砂糖たっぷりの状況でコーヒーの味がわかるのか俺は疑問だ。（まあ、マスターの腕は確かだが）

コーヒーを飲み終わった後は何事もなくデート（映画鑑賞等）は進み、巽たちのライブを見た後、俺達は家路に着いた。

「それにしても、いい歌だったね。特にサビの部分が」

葎花はしきりに巽のバンドをほめる。

「うまかったけど、ホントにすごいのはこの曲を作ったグループな

「んだけどな」

「何でそういうこと言うの？」

「律花は不服そうである。すごいものはすごいと、素直にほめるのが律花の基本スタンスだからだ。でも、うまければいいという訳でもないはずだ。」

「俺は、コピーだけじゃなくてあいつら自身の作った歌を聞きたいんだけどな」

「それじゃあ、コピーバンドの意味がないんじゃない？」

「まあ、それもそうなんだけどさ」

それでも俺はもったいないなと思わずにはいらなかった。

律花を家に送り、自宅に帰ると。

「ただいま。母さん、どうしたんだ？」

母さんが焦った顔で出迎えた。

「お帰りなさい。里緒菜から電話か何かなかった？」

「なかったけどなんで？」

「電話がつかないのよ」

母さんの話によると、買い物頼もうとしたところ、里緒菜の携帯につながらないのだそうだ。俺は少しあきれながら言う。

「別に小学生じゃあるまいし、大丈夫だろ？」

自分の部屋に行ってみると、携帯が充電しっぱなしだった。どうやら忘れていたらしい。これでは連絡が入るはずもない。俺は、留守電をチェックしてみることにした。

一件のメッセージが残されていた。

『お兄ちゃん助けて！』

留守電に残された里緒菜の声は、逼迫していた。

それを聞き終わると同時に、一通のメールが届いた。

第十二話：土蜘蛛その3

送られてきたメールの内容を見ずに、俺は110番通報しようとしたが、龍王さんに止められた。

『とりあえずメールを見てください』

俺は渋々メールを見ることにする。

差出人：霊界

件名：指令

悪霊に取り付かれ、理性のとんだ土蜘蛛を鎮めよ。
妖怪の位置はここからダウンロードせよ。

『指示に従ってください』

龍王さんに言われ、仕方なく俺はダウンロードをした。ソフトが起動し、この町の地図と赤と青の点が現れた。

青が現在位置、赤が妖怪を示しているらしい。

『これは、千里眼システムと言って・・・』

「龍王さん・・・」

俺の焦燥を感じ取ったのか、九尾はやれやれといった風で、龍王さんに話しかける。

「ナンちゃん、あんた説明長すぎなのよ。狐宮君、携帯貸して」

九尾は、七本の尾を器用に使いこなして、携帯を操作すると俺に画面を見せてきた。そこには、妖怪の現在の状況がリアルタイムで送られてきているようだ。

俺は、巨大な蜘蛛の背中に、数人の人間を見た。その中には、里

緒菜も映っていた。

「これは・・・」

『これで利害は一致したわね。行きましょう!』

『すなわちこの千里眼システムは・・・』

龍王さんはまだ説明していた。九尾が龍王さんの尾に噛み付く。

「ひぎやつ!」

変な声を出しながら、のた打ち回る龍王さん。

『何をするんだ!』

九尾は冷たい視線を浴びせかけながら言い放つ。

『この説明魔が!そんな場合じゃないでしょが!』

『いや、こういうことはだな・・・』

『問答無用!さつさと式を出して!』

九尾のものすごい剣幕に押されて、龍王さんは目を光らせて人型の紙を一枚出現させた。

『狐宮殿、その紙に触れてください』

俺が紙に触れると、紙は俺そっくりに変わった。

『留守中頼んだぞ』

「承知しました」

『狐宮君、行くよ!』

俺は、九尾たちが続いて、押入れの中にあつた新しい靴を履き、窓から飛び出した。

「っておい!俺、飛べねえよ!

二階から飛び降りる形になってしまった。俺は焦ったが、なぜか身体が勝手に反応して、うまく着地できた。

『忘れた?私の能力は身体能力の向上よ。反応速度も人間のそれを軽く凌駕するわ』

九尾の声が俺の中からする。

「誰!？」

母さんの声がある。この場を離れるために俺は走り出した。同時に九尾の質問に答える。

『九尾のほうからも発動出来るとは思わなかったんでね。』

『他の能力発動より単純なのよ。憑依するだけだから』

俺は、人を超えたスピードで走っていく。人の目にはおそらく見えていないはずだ。携帯で土蜘蛛を追っていき、ちようど点と点が重なるところにやってきた。

回りを確認するが、巨大な蜘蛛は影も形もなかった。龍王さんが発言する。

『土蜘蛛は、地下を移動する習性があります』

『巨大な蜘蛛が通り抜けられそうな地下道といえば・・・、地下鉄か！』

俺は、最寄りの駅から地下鉄のホームに降り立った。もちろん切符を買った。

『律儀だねえ、見えないスピードで行きやいいのに』

九尾には揶揄されたが、こういうところはしっかりしないと駄目だと思った。

ホームに降りると、そこは異様な雰囲気包まれていた。息が苦しくなるような、体が重くなるようなそんな雰囲気。携帯の反応も強くなっていた。しかし、蜘蛛の姿はどこにもいない。電車を待っている人々がいるだけだ。

それに、何でここで留まったままなのだろう。こちらに気づいているなら、何らかのアクションを起こすはずだ。

『この近くに巣があるみたいだな』

不意に声がした。俺が振り返るとそこには巽と見知らぬ女性がいる。女性は黒いスーツにスカート、そして、サングラスを掛けるといふ、全身黒尽くめのいでたちだった。

女性は、警察手帳を出しながら乗客に呼びかける。

「警察の者です！この駅構内に爆弾が仕掛けられているという情報が入りました。乗客の皆さんは、直ちに駅構内から避難してください」

その声に呼応するように、巽と黒尽くめの女性の後ろから、数人

の警察官が現れ、乗客を誘導していった。

「あなたは？それと、何でお前がここにいる？」

巽は淡々と答える。

「彼女は、霊界から送られてきた俺達のサポート役だよ。もう下がっていいですよ。」

すると女性は、煙のように消えてしまった。

「霊界って、それじゃあ、お前も・・・」

「そう、俺も契約者さ。ついでに言うと、さっきの警官もサポートだよ。さあ、人払いもすんだことだし、始めようか。妖怪鎮め」

俺は焦燥感に駆られながら巽に問う。

「でも土蜘蛛はどこにも見当たらないぞ」

巽は自身ありげな顔だ。

「俺の能力には探索系もある。すぐに見つけてやるから、お前は自分の能力を確認しとけ」

巽は俺から少し離れ、指を鳴らした。

『それじゃあ、こっちも能力の実践といくわよ』

九尾と龍王さんから使い方のイメージが流れ込んでくる。

『それじゃあ、使ってみて。でも、私の尾一本につき武器一つだから気をつけて』

俺は目を閉じ、日本刀を二振りイメージした。目を開くと、両手にはしっかりと、日本刀が握られている。

『上出来ね、こんな感じで・・・』

「見つかったぞ。というか出てくる！」

巽の声が響く。俺たちの目の前に巨大な蜘蛛があらわれた。

「龍王さん行きますよ！」

『いやいや、そんな感じじゃなくてもっと命令口調でいいから』

九尾の突込みを受けて、俺は口調を変える。

「行くぞ！龍王開眼・紅蓮」

俺は、刀に炎の力を込める。

「紅蓮双剣」

そして、俺は蜘蛛に向かって突進した。

第十三話：土蜘蛛その4

龍弥が突進し、斬りつけると土蜘蛛はさっと飛びのく、その巨体の割りに、素早い動きをする土蜘蛛に舌打ちをしながら、なおも土蜘蛛に対して攻撃を仕掛けていく龍弥。

しかし、土蜘蛛を追って線路に飛び降りると、不意に足が動かなくなる龍弥。

「これは一体!？」

『蜘蛛の糸ね。罨を仕掛けられていたんだわ』

九尾が答える。龍弥は必死に抜け出そうとするが、倒れてしまう。さらに、もがけばもがくほど糸が絡みつき、全く身動きが取れなくなってしまう。

それを好機と見たのか、土蜘蛛が龍弥の方に迫ってくる。

「俺を忘れんじゃねーよ!」

巽が土蜘蛛に対して飛び蹴りを入れる。もろに食らった土蜘蛛は、少し後退する。

「ありがとう。でも少し余計だった」

龍弥は少し毒づく。そして、蜘蛛の糸を焼き払いながら立ち上がる。

「近づいてきたところを攻撃しようと思ったのに」

それに対し、巽は少し憤慨したように言う。

「しょうがないだろ。あの状況なら」

龍弥はあくまで、冷静に切り返す。

「ああ、わかってるよ。でも、もう少し信用してくれよ。お前と違って俺は鍛えてるんだから」

「俺だって鍛えとるわ!」

「俺が言ったのは実戦の勘も含めてだ。お前、勝負の駆け引きとかほとんどないだろ。戦うって言うっても喧嘩がせいぜいだろうし」

龍弥はやれやれといった感じで、説明する。実際、勝負勘は龍弥

のほうが強かった。剣道で鍛えているのだろう。

しかし、巽は本当に憤慨してしまったようだ。

「おう、そうか。じゃあ、見せてやるよ俺の力を！てめえはそこで見てろ！」

「わかったよ。じゃあ、お手並み拝見といこうか？」

売り言葉に買い言葉では無いが、龍弥は巽に任せてみることにしたようだ。さつさとホームに戻ってしまった。

二人を目の前にして土蜘蛛は襲い掛かるのを躊躇っていたが、龍弥が戻ると巽に襲い掛かる。土蜘蛛は前足を振り上げて、巽を捕らえようとするが、巽はひらり、ひらりとかわしていく。そして、隙を見て土蜘蛛の腹に拳を叩き込む。土蜘蛛は吹き飛び、仰向けに倒れた。

しかし、悪霊は未だに姿をあらわさない。業を煮やした巽は、自身の能力で悪霊をいぶりだそうと近づぐが、土蜘蛛は球状の意図を無数に発射する。一面に張られた弾幕のようなそれをよけることは不可能だった。

そして、巽は身動きが取れなくなってしまった。

土蜘蛛は糸を天井に張り付け、元の姿勢に戻ると巽に襲い掛かる。とゆつくりと近づいていく。

「待たせたな」

そこへ龍弥の声が響く。と同時に龍を模った炎が土蜘蛛に襲い掛かる。火達磨になる土蜘蛛。

しばらくして不意に炎が消え、瀕死の土蜘蛛が現れた。その隣には龍弥と足の無い女が立っている。足の無いほうはおそらく悪霊化していた幽霊だろう。

龍弥は紅蓮双剣をしまう。そして、別の能力を発動する。

「龍王開眼・無色^{むしき}」

龍弥の瞳が水色に変わる。巽のほうに手をかざすと、目が赤く、透明な龍が巽を包み込み、数秒で絡みついた糸を洗い落とした。さらに、龍は土蜘蛛を包み込み、傷を回復する。

「龍王開眼・転映」

龍弥の瞳が今度は通常と同じ黒に変わり、土蜘蛛を消した。

「おい、何やってんだ!？」

おそらく、鎮めたはずの妖怪を消してしまったと思った巽は、びつくりして叫ぶ。

「大丈夫だ。いるべきところに返したただけだから」

「どういうことだ？」

「転って言うのは、転送の転なんだよ。だから、いるべき場所に返したんだよ。それよりも、時間稼ぎお疲れさん」

ねぎらいの言葉に対して、巽はいささか不安に駆られながら、巽に問う。

「時間稼ぎ？」

「おう、お前のおかげで、土蜘蛛に襲われた人達を助け出せたぜ」

「じゃあ、俺を怒らせたのはわざと・・・」

巽の拳がぎゅっと握られ、プルプルと震えだした。

「だしに使って悪かったよ。だからそんなに怒るなって
険悪なムードが流れる。

「あ、あの・・・」

女性の幽霊が喋りかけてきた。

「なんだ!」

「ひっ!」

巽の大声にひるんで、幽霊は龍弥の後ろに隠れる。

「本当に悪かったって。ごめんなさい。だから、幽霊に当たるな」

「ああ、そうだな。だが、二度とこんなことはするなよ!」

「わかったから。そんな怒鳴るな。それと場所を変えよう。」

人の気配を感じ、龍弥は幽霊と巽と共に自分を転送した。

第十三話：土蜘蛛その4（後書き）

補足をしておくと、霊界の工作により、電車は止められています。

第十四話：精霊流し 五十嵐千絵編

龍弥の能力で、近場の公園にやってきた龍弥、巽、そして、女性の霊は今後の行動を検討していた。

最初は龍弥の質問から始まった。

「何で、妖怪と分離させたのに、彼女は成仏できないんだ？」

「お前の契約した神は何も教えてないんだな」

巽は完全にあきれ返っている。その後ろには巽の契約神、ヤマタノオロチとマホラガが、ミニマム化して浮いている。

「まあ、今回は時間が無くてこんな風になっちゃったがよ。難陀と玉藻はいいやつなんだ。仲良くしてやってくれ」

ヤマタノオロチがリンクをはって龍弥に話しかけた。

「ああ。いいよ」

龍弥は快諾した。根がいいのはわかっていたのだろう。

「それじゃあ、ここからの説明は私がしよう」

今度はマホラガが説明を開始した。

「まず、妖怪と分離させた程度では、霊は成仏できない。これは実際に見てもらったからわかると思う。ではどうするか、この世に執着している原因を取り除く。そうすれば、霊は自動的に霊界に行く。」

「なるほど。じゃあ、早速聞いてみましょう。」

女性霊の方を向いて、龍弥は問いかけた。

「話してくれますか？あなたの末練を」

「私の名前は五十嵐千絵といいます」

「五十嵐千絵、どこかで聞いたことがあるな」

巽は首をかしげながら、必死に思い出そうとしている。龍弥は何かに気づいたようで、ハツとした顔になる。

「数日前に地下鉄で人身事故があって、そのとき死んだ人が同じ名前だったはず・・・」

「はい。おっしゃるとおり、私は電車で轢かれて死にました」

「そのことが、この世に対する未練と関係があるのですか？」

千絵はポツリ、ポツリと話し始めた。

『私が転落したのは、誰かに押されたからなんです。結婚間近だったんですよ。それがこんなことになってしまって……。多分、押した人への恨みから、蜘蛛に取り付いてしまったんだと思います』
「なるほど、復讐ですか」

巽は納得したように、うんうんうなずいた。目には涙が浮かんでいる。

「じゃあ、俺達がその人に法の裁きを受けさせ、社会的に抹殺……」

巽はのりのりだが、それをさえぎるように千絵は言った。

『いえ、蜘蛛から切り離されたときに、復讐とかどうでも良くなつて……。』

「え？龍弥、お前何したの？」

巽は、また小首をかしげ、龍弥に問う。切り離した程度で未練が小さくなったのでは、さっきの話と明らかに矛盾している。

「龍王曰く、浄炎だとさ」

土蜘蛛を炎で包んだときに、霊の心を浄化したのだという龍弥に対し、巽は驚嘆した。

「は！？お、お、お前、何で最初からそんな高レベルなの使えるの？不公平じゃない！？」

「いや、それはほら、俺って天才だから」

「そんな理由があるか！頭の出来はそんなに変わらんだろうが！」

「だから、言っただろう？勝負の駆け引き……」

「関係ねえええ……！」

『狐宮殿、響殿？口論もいいのですが……。先へ進みましょう』

千絵がオロオロし始めたのを見かねて、難陀が仲裁に入る。

「そうだな。この話はまた後だ。それじゃあ、あんたの今の望みは何なんだい？」

巽はぶっきらぼうに聞く。

『私の婚約者と一回だけ話がしたいんです。お別れが言いたいです』

「了解しました。それじゃあ、早速行きましようか。婚約者の家へ」

婚約者、松本孝太の屋敷に近い位置で、龍弥たちは作戦会議を開いていた。

「婚約者の方って、お金持ちだったんですね。これはセキュリティがいくぐるの難しそうですよ」

龍弥は、自分の分析と見解を述べた。

「転映を使えばいいだろう？」

巽の反論に龍弥は難色を示す。

「婚約者がどこにいるか分からないのに、闇雲に転映使っても意味が無いだろう？」

「あ、それもそうか・・・」

『なあ、巽。自分の能力使えよ。』

「あ、そうだな」

巽はヤマタノオロチに言われてやっと思い出したようだ。龍弥の能力レベルが高すぎて、自身の能力を忘れていたのだろうか。

「お前の能力？」

龍弥は龍弥で、身体能力強化と敵を見つける能力以外ないと思っていたようだ。まあ、戦闘の時に全く使わなかった巽も悪いのだが・・・。

「ああ、正面から行けるぞ。堂々とな。」

巽は不敵に笑いながら、屋敷の門に向かう。龍弥と千絵もそれに倣った。

ピンポン

チャイムが鳴った。老いた執事が、インターホンのモニターを覗き込む。二人の顔立ちが整った少年が映っていた。

「こんな時間に何の用かね？それに、ここは君達が来る場所ではないよ」

門前払いしようとした執事に対して一人の少年が声をかける。

『松本孝太の所に通せ』

「はい、かしこまりました」

声をかけられた途端に、老人は主人と同じ態度で接するようになった。

二人を出迎え、孝太の部屋の前まで案内する執事。

「もう、戻ってください。それから、この部屋にしばらく誰も近づかないようにしてください」

「はい、かしこまりました」

執事はどこかへ消えていった。

「これが催眠眼か、すごいじゃないか」

「まあな」

巽は自慢げだが、龍弥は疑問でしかないようだ。

「なんで、戦闘で使わなかったんだ？」

「卑怯だからだよ」

「いや、命がかかってたら、卑怯とか関係ないだろ……」

『話が脱線してるわよ』

玉藻が、話を元に戻す。

「ああそうだね、それじゃあ頼むよタマ」

『なんか私ペットみたいね。まあ、いいわ』

次の瞬間、龍弥の姿が千絵さんのそれに変わっていた。服装は死亡したときの物だ。

『すみません。私の為に……』

「いえいえ。それじゃあ行きましょう」

声までもが、千絵と同じになっていた。

「誰だ？入っでいいと言った覚えは・・・」

松本孝太は愕然とした。そこに立っていたのが死んだはずの婚約者だったからだ。

「千絵、千絵なのか？」

「ええ、私よ」

「生きていたのか？」

思わず駆け寄る孝太。その目には涙が浮かんでいる。そして、千絵を抱きしめる。

「孝太、お別れを言いに来たの」

「お別れ？・・・そうか、そうだよな。遺体確認もしたんだ。生きてる訳無いよな」

千絵は、涙を浮かべながら、それでも笑顔を作って語りかける。

「あなたと出会えて本当に良かった。あなたという時間が私の全てだった。本当にありがとう。そして、あなたは幸せになってね・・・

・さようなら」

「待ってくれ、せめて最後に・・・」

去ろうとする千絵を抱き寄せ、唇を重ねる。しかし、千絵の感触はだんだんと無くなり、そして、完全に消えてしまった。

「千絵、さようなら。僕も君を愛していたよ」

所変わって、こちらは龍弥達が千絵から事情を聞いた公園。元の姿に戻った龍弥がしゃがみ込んでいる。どうやら消える演出は転映を使った様だ。

「おええ・・・」

「天晴れだな。アカデミー賞物だ」

気持ち悪そうにしている龍弥を、必死に笑いをこらえながらフオーする巽。千絵は成仏できたのだろう、姿は無かった。

「でも、まさかキスされるとわなあ……。く、駄目だ。わはははは……。」

計画は途中まで順調だった。千絵の姿に化けた龍弥に千絵を憑依させ、お別れを言うところまでは……。しかし、キスは想定外だった。

「大体、何で俺の意識が残るんだよ！一時的に千絵さんが完全にコントロールして、俺は眠ってるでいいじゃねえか！」

『狐宮殿、暴走の危険性があるので、それは出来ないのです』

まあ、当然といえば当然だ。今回はご愁傷様としか言いようが無い。

巽は、まだ笑い転げている。

「おい、巽」

龍弥は先程生成した日本刀の切っ先を巽の喉元に突きつける。途端に巽は笑うのをやめた。逆に龍弥は満面の笑みだ。契約神達は、ドン引きしている。

「巽、笑えよ。わ・ら・え・よ」

「ごめんなさい」

巽の顔は思いつきり青くなり、引きつっている。切っ先を突きつけられているからではなく、龍弥の全身から殺気がほとばしっているからだ。

一分近くたつて龍弥は唐突にしゃべりだした。

「そう、謝罪だ。悪いことをしたら謝罪。これは人生の基本だよな？」

「はい！」

「いい返事だ」

龍弥はようやく刀を消す。表情もすっきりしたものになり、口調も元に戻った。

「で、さっきの続きだけど、こんな状況になったのは、誰のせいだ

ろう？」

「そりゃあ、元をたどれば、千絵さんを線路に落とした人だろ」

「その通り！あんなに幸せそうな人達を引き裂くとは、言語道断！だからさ、俺たちで復讐しないか？」

目を輝かせながら訴える龍弥。目をそらせながら、巽は答える。
「お前の復讐のような気もしないでは無いが、まあそうだな。で、どうするんだよ？」

「謝罪させた後、精神崩壊・・・」

「そうじゃなくて、どうやって見つけるんだ？」

「まあ、任せろよ。待つてろよ！千絵さん殺害犯！」

夜の公園に、龍弥の高笑いがこだました。

幕間その1

龍弥が男と口づけをした夜が明け、朝。

龍弥はいつも通りにトレーニングを終え、朝食をとる。今日は日曜日なので龍弥以外は誰も起きていない。

もむもむ

龍弥が朝食をとっていると、リビングの扉が開く。

「お兄ちゃん、おはよー」

「ああ、おはよう」

「ねえ、お兄ちゃん？」

理緒菜は冷蔵庫から牛乳を取り出しながら、龍弥に話しかける。

「昨日、デートから帰ってきてからはずっと家にいたんだよね？」

「ああ、それがどうした？」

「なんか、私を昨日助けてくれた人がお兄ちゃんに似てたんだよ」

龍弥は、厳しい顔になった。

「蜘蛛に襲われたってあれか？夢でも見てたんだろ？見つかったとき、寝てたって言うし。それよりも母さんが心配するから、金輪際危ない真似はしないようにな！」

牛乳をコップに入れていた理緒菜はむすつとした顔になる。

「危ない真似なんかしてないよ。それに、あの人は……」

「！」

「あの人は、本当の母さんじゃないじゃない」

理緒菜は龍弥に背を向け、牛乳を一気に飲み干す。龍弥と理緒菜の今の母親が起きていたらどうなっていたか。

気まずい雰囲気になれなくなったのか、龍弥が口を開く。

「理緒菜。もう、いいだろう？確かに、今の母さんは、本当の母さんじゃない。けど、俺たちの母さんであることに間違いは無いんだから」

理緒菜はさびしげな声で答える。

「・・・私はお兄ちゃんみたいに割り切れないよ。・・・もうちょっと寝てくる」

理緒菜は自分の部屋に戻っていった。朝の日差しがうつすら差し込む中で、龍弥一人が取り残された。

「今日も晴れかな？」

龍弥は食器を片付けながら、ぽつりと独り言を言った。

第十五話：敵その1

朝、五十嵐千絵の遺骨が納められている寺の前に、長身の少年が二人立っている。

一人は女好きのする顔で、黒髪を無造作にセツトしていて、もう一人はこれまた整った顔に眼鏡をかけ、こちらはきつちりと髪をセツトしている。

眼鏡の少年がもう一人の少年に話しかける。

「んで、どうするんだ？」

「ああ、九尾に霊子のおいを嗅がせて犯人を見つけるんだよ。頼むよ」

『ほい』

「間の抜けた返事だな」

眼鏡の少年が揶揄する。

『別に危険じゃないんだからいいでしょ？』

「そうだよ。くだらない事は置いてさっさと終わらせよう」

少年はずんずん進んでいく。

『くだらないこと・・・』

「九尾、仕方ないって」

『巽君、ありがとう』

先に進んでいた少年は振り向いて、言う。

「早く来いよ」

「わかってるよ龍弥」

五十嵐千絵の墓前に立つ龍弥と巽、宙に浮くミニマム九尾。龍弥と巽は墓前に手をあわす。

九尾が墓ををかぎまわる。

『ふん、ふんふん。わかったよ。行こう』
九尾が歩き出し、それに二人が続く。

古いアパートの一室で男が寝ている。一人暮らしでものぐさなのか部屋の中は散らかり放題。ごみ屋敷と言っても過言では無い。

コンコンコン

部屋のドアが叩かれる。男は起きない。

ドンドンドン

ドアを叩く音が強くなる。男の体がびくつと反応するがまだ起きない。

「安藤昌也さんいないんですか!？」

声がかかるが、男は全く起きない。

静かになる。外の人物は立ち去ったのだろうか。

カチャカチャ、カチャリ

鍵が開き、二人の少年が入ってくる。男はまだ起きない。

少年のうちの一人が男の腹を蹴飛ばす。

ぼすっ

「!?!えほッえほッ」

ようやく男が起き、セキをした後、悪態をつく。

「お前ら一体なんだ!?!どこから入ってきたんだ!?!ああ!?!それとよう。いきなり腹に蹴り入れるとは・・・」

少年の一人がのどもとに刀をつきつけると男は黙り込む。

「安藤昌也。あなた、五十嵐千絵を殺しましたね?」

刀を突きつけた少年は男に問いかける。

「ふん、確かに俺は安藤だが、殺しなんかやっちゃいねえよ」

「嘘を言うとならねえぜ?今の状況わかってるだろ?」

もう一人の眼鏡をかけた少年が嫌味ったらしく、問いかける。

「お前らこそ、分かってねえな。誰か!助けてくれ!」

安藤の叫びに反して、誰も来ることは無かった。

「何でだ？何で誰も来ない！？」

安藤は狼狽し、パニックに陥る。

「安藤さん、正直に話してくれれば、僕らも悪いようにはしませんよ」

「分かった。話すよ！確かに女を一人殺した。地下鉄のホームから突き落としてな。ようし、話したぞ！だから助けてくれ！」

刀が引かれほっとする安藤。

「どうして、殺したんですか？」

刀を持った少年が安藤に問う。

「金のためさ。依頼が来て、それを俺が遂行したまでだ」

「その依頼主は？」

「見ず知らずの男さ。そういうえば、悪霊の研究がどうのと言ってたが・・・、まあよくわからねえよ」

「巽？」

「ああ、嘘はついていない」

刀を持った少年は笑顔になり、安藤に話しかける。

「すいませんね。それじゃあ、お邪魔しました。」

「ちゃんと自首しろよ」

眼鏡の少年にそう言われると、なぜか安藤は素直に従い、電話に手をかけ110番通報をした。それを確認すると二人の少年は部屋から出て行った。

「あれでよかったのか？」

巽は龍弥に問いかける。昨日の事を考えれば当然のことだった。

「ああ。昨日は、頭に血が上ってたし、それに、人に人を裁くことなんか出来ないからね」

「ずいぶんと哲学的な考え方だな」

巽は苦笑する。

「そうだな」

龍弥も苦笑する。

「どうする？ 依頼主も探すか？」

巽は少し疲れた表情で言った。

「ああ。でも、霊子のおいが無かったから、地道にいくしかないな。それにしても、悪霊の研究者か・・・」

何か引っかけりを感じながら龍弥たちは家路に着いた。

第十五話：敵その1（後書き）

作：今回龍弥が転映を使わなかったのは、能力の使いすぎによるものです。なお、ピッキングは犯罪ですのでくれぐれもしないでください。

龍弥：誰もそんな事せんわ！

ズバシーン！

作：ぐはっ、って君達は・・・

ドバシーン！

龍弥：失礼しました。では次回もお楽しみに！

第十六話：敵その2（前書き）

大学が始まって忙しく、更新が遅れました。そして、短くてすみません。

第十六話：敵その2

土蜘蛛鎮静から一週間、靈界からの指令は無く、戦いは無かった。千絵さん殺害の依頼主は結局見つけることが出来ないままである。自首した安藤も、龍弥達に話した以上のことを語ってはいない。しかし、龍弥に平穩は訪れなかった。

ある晴れた日の夕方。剣道部の練習を終え、家に帰る途中に龍弥は一匹の猫に出会った。龍弥は猫に近づいて、しゃがみこんで手を差し出す。

かぶっ

噛まれた。

「痛っ」

猫はどこかに行ってしまう。

『ぶっ、そりゃ狐宮君無理だっ！』

九尾が大笑いしながら、茶々を入れる。

『何だよ？』

龍弥は歩きながら問う。

『だって、私達が憑いてるんだもの』

九尾の態度は尊大だった。

『自慢げに言うことか！？』

『だって自慢だもん！私達は偉いのだ』

『全く・・・』

「わっ！」

「ふお！」

急に声をかけられて、びくっとして龍弥が振り向くと、律花がいた。

「おどかすなよ」

「ボーっとしてたから、つい・・・」

「てか、何度も言うけど、俺の死角に気配を絶って立たないでくれ。怖いから」

葎花は感心したような顔になる。

「ふーん、ここが龍弥の死角なんだ」

龍弥は顔を引きつらせる。葎花は不思議そうな顔をして、一言。「どうかしたの？」

「ああ、もういいよ。そこがお前の良さだもんな」

思わず涙する龍弥。それを心配して顔を近づける葎花。

「大丈夫？」

「ああ、大丈夫だから」

「そ、そう。ところでさ」

「何？」

「来週は来れそう？」

「大丈夫。行けるよ」

葎花は満面の笑みになり、ほっとした様に言った。

「良かった」

龍弥に噛みついた猫が、暗い路地を歩いている。猫は何かを感じ取ったのか、立ち止まる。

前方には男が倒れていた。夥しい量の血が流れている。

猫はしばらく警戒していたが、再び歩き出した。男の横を通り過ぎようとしたとき、男の中から黒い球体のような物が出てきて、猫にぶつかった。

猫は少しよろめいたが、再び歩き出した。

二股に分かれた尻尾を振りながら・・・。

第十七話：敵その3

その日は土砂降りの雨だった。家路を急ぐ人々と同じように、葎夏も急いでいた。

葎花は雨の日が好きだった。周りからは少し変わっていると言われた。でも、雨の日が好きだった。雨が傘を打つ音が好きだった。雨に濡れた街並み、風景が好きだった。そして、雨の日はいいことが起こるから好きだった。

でも、今日は違っていた。

家に帰り着き、葎花はドアノブに手をかける。

カチャカチャ

ドアは開かない。鍵がかかっているようだ。

『あれ？明かりついてるのに・・・』

葎花は疑問に思いながら、鍵を開けて家に入る。

「ただいま」

返事はない。

聞こえなかったのだろうか、それとも電気をつけっぱなしで、どこかに出掛けてしまったのだろうか？

葎花は自分の部屋に行き、荷物を置くとリビングに向かった。リビングに続くドアを開け、足を踏み入れる。

ぴちゃっ

水溜まりを踏んだ感触がした。葎花は足下を見る。真っ赤な液体

が有った。不安に駆られ、誰かに電話しようと、電話機に目をやると、そこには喉を喰い破られたようになり、血を垂れ流した母がいた。

葎花はその場にへたれこみ、呆然となり、しばらくして電話をかけた。

ピロリロリー　ピロリロリー

龍弥が部屋で夏休みの宿題をやっていると、携帯の着信が鳴った。
「もしもし？」

『龍弥？』

「葎花か。どうした？」

『今、ひま？』

葎花の声は消え入りそうなほど弱々しかった。

「ひまだよ。それより大丈夫か？」

『ちよつと大丈夫じゃないかも・・・』

「今、どこにいる？」

『家にいる』

それを聞いて龍弥は、すぐさま決断を下し、葎花が安心できるように、話し掛ける。

「じゃあ、今から超特急で行くから待ってる」

『わかった』

電話が切れると、龍弥は、母親に断りを入れて外に出る。
そして、龍王の能力を発動する。

「龍王開眼・転映」

ピンポン

インターホンが鳴った。葎花は相手を確認して、ドアを開ける。

「葎花。なにがあった？」

ドアが開くなり龍弥は聞く。葎花の顔には血の気が無く、服には赤いしみがあつた。靴下は赤く染まっている。

「たつや・・・」

葎花はそうつぶやくと、龍弥にもたれかかる。

「葎花、とりあえず部屋に行こう」

部屋に入り、葎花をベッドに腰掛けさせる。葎花はまだ少し茫然自失の状態だ。

「何があつた？」

「リビング・・・」

「リビングに何かあるんだな」

葎花は、こくんとうなづく。そして、顔を伏せて、固まった。

龍弥は、一度状況を確認しようとしてリビングに向かった。

数十秒後、龍弥が戻ってきた。

「隣、良いか？」

葎花は、何も反応しなかったが、龍弥はそつと隣に座り、葎花の肩を抱く。

「う、う、う・・・」

葎花は安堵したのか、現実を受け止めたのか、むせび泣き始めた。

「とりあえず、君は帰ったほうがいいんじゃないか？」

現場検証に来た刑事の一人が龍弥に話しかけてきた。

「心配しなくても、彼女はきちんと保護するから」

「母には許可とってありますから」

「いや、しかしだね」

「そばにいてあげたいんです」

「わかったよ」

そう言って、渋い顔をしながら刑事は去って行った。菫花は泣き止みはしたが、顔を伏せたままだ。

「龍弥？」

「なんだ？」

「帰ってもいいんだよ？」

「なんで？」

「何も食べてないんでしょ？」

「それは菫花もだろ」

「そうだけど・・・」

「いちゃ駄目なのか？」

しばしの沈黙、龍弥は優しい声音でささやく。

「そばにいるよ。・・・ずっと」

ピロピロピロピロピロピロピロ

龍弥の携帯が鳴る。

『メール？』

差出人：霊界

件名：指令

悪霊に取り付かれた猫又を鎮めよ。

『こんなときに・・・』

龍弥は舌打ちをしたい気分だった。

『指令は指令ですから・・・』

龍王はなだめるように言ってくるが、任務遂行のためなのはバレた。

『ったく、仕方ないな。龍王さん』

ピロリロリー　ピロリロリー

「もしもし？」

龍弥はイライラを表に出さないように努めた。

『龍弥か？指令がきたよな？』

「ああ」

『お前は来るな』

「？」

『お前は染井のそばにいる』

「なんで俺が葎花のそばにいるのが分かるんだ？」

『ニユースだよ。ニユース。それにしても行動が早いなあ』

「ニユース？」

『見てないのか・・・。とにかく、今は染井のそばにいてやれ。いいな？』

「・・・ありがとう」

『別に、礼には及ばねえよ』

電話が切れると、葎花がこちらを見つめているのに気づく。

「どうした？」

「・・・ニユースになってるんだね」

「ああ、そうらしいな」

「学校行けるかな？」

「大丈夫だよ。葎花は一人じゃないだろ？」

葎花はしばらく逡巡して、躊躇いがちに話す。

「あのさ、しばらく龍弥の家に泊めてくれないかな？」

その瞬間、龍弥の思考は停止した。

すでに雨は上がっている。月明かりがあたりを照らしていた。駅の近くのビルの屋上に二人の人影がある。一人は異だった。異が携帯で話し終わるともう一人に話しかける。

「これでよかったんだな？春華」

春華と呼ばれた少女は、龍弥たちと同じ学校の制服をきて、腰まである長い髪をポニーテール状にしている。

その整った顔立ちは月も恥じるほどだろう。

「ええ、今回の事件は私が解決すべきなのよ」

その一言には、固い決意が込められていた。

第十七話：敵その3（後書き）

三人目の契約者、乾春華の登場です。巽と春華の活躍は次回をお楽しみに。（龍弥の活躍を期待された方ごめんなさい）
ついでに言つと、巽の苗字は響ひびきです。

第十八話：敵その4

ビルの屋上で一匹の猫が、月を見上げながら座っている。その顔は何か哲学的な思索をしているようで、神秘的な雰囲気醸し出している。

猫はふと後ろを振り返った。そこには、二人の人間が立っていた。一人は、猫が最も憎んだ人間の一人だった。

名を乾春華という。春華は猫にゆっくりと近づいていく。

猫は春華の方を向き、焦る気持ちを抑えながら春華が自分の間合いに入ってくるのを待った。だが、間合いにぎりぎり入らない所で春華は立ち止まった。

「鳳凰・壺の太刀」

春華がそう呟くと、目の前に朱い柄の薙刀が現れる。春華は、それを手に取り、構える。

全く隙のない構えで、猫の間合いに入っていく春華。優美さはなく、機械的な動き。

猫は不利だと感じたのか、一旦間合いをはずそうとする。

春華はその動きにあわせて一気に斬りかかる。

斬撃をすんでの所でかわした猫は、すぐさま飛びかかった。

春華は猫を柄ではじき、間合いを取る。

猫は宙返りをして着地すると同時に姿を消す。さらに、春華の右足首に鈍痛が走る。見ると、猫が噛みついていていた。

春華は薙刀で猫を振り払うと、膝をついた。足首からは少し血が流れている。

もう一人の人間が、駆け寄ろうとするが、春華はそれを拒む。

「巽！これは私の戦いだから、お願い・・・」

強い意志が込められたその言葉に、巽は動くことも声をかけることも出来なかった。

「さあ、来なさい！」

春華は猫に呼びかけた。

十年前：

「おいで、ミーちゃん」

猫は人間に応えて近づいていった。

「にゃあ」

「おー、よしよし」

猫を抱き上げたのは幼き日の春華だった。

そう、猫はかつて春華に飼われていた。それは、とても幸せな生活だった。

やがて、猫に子供が産まれた。猫は子猫達と暮らしたかったが、一匹だけ残して、子猫達はもらわれていった。

そこまではよかった。まだ、猫は納得していた。

ある日、猫は子供達の様子が気になって見に行った。子供達のほとんどの、優しい飼い主の元ですくすく成長していた。

一匹を除いては・・・。

猫は、最後の家にたどり着いた。晴れていた空は、どんよりとした雲に覆われて、今にも雨が降り出しそうだった。

猫は家の庭に入った。

「ミー、ミー」

か細い鳴き声が聞こえてきた。鳴き声のする方に行ってみると、そこにはやせ細った我が子がいた。

猫はわが子を救うために我が子をくわえて走った。途中で雨が降り出した。それでもかまわず走った。

今、考えれば春華の所ではなく、ほかの子猫がいた老人宅の方が

近かったし、安全だったのだが、そんな考えも浮かばず、ただ一番信頼している春華の元に急いでいた。

家にたどり着く。自分専用の入り口から入る。

「にゃー、にゃー」

すぐに、春華とその母がやってきた。

「あら、こんなにずぶぬれで・・・」

春華の母は優しく体を拭いてくれた。

「こっちの子は誰かしら？」

猫の傍らで、ふるえている子猫に気づくと、こちらも優しく拭いてやる春華の母。

「お母さん。この子、葎花ちゃんにあげた子だよ」

前に様子を見に行ったとき、ついていた首輪を見て、春華は言った。

「なんか、前よりやせたみたい・・・」

「そうね・・・、今日はもう遅いし家で預かりましょう」

「お水とご飯持ってくるね」

後日、子猫は葎花の母親に引き取られた。猫はそのとき激しく暴れたが、結局無駄な抵抗だった。

当時、葎花の両親は離婚調停中であり、葎花は親戚の家に預けられていた。そのことを春華が知っていたいれば、猫のそして、子猫の運命はもつと違っていたのかもしれない。

春華は猫の攻撃でぼろぼろだった。急所への攻撃は何とか防いでいたが、それも限界に近いはずだ。

「いい加減にしろ！意地張ってる場合か！」

巽は思わず、助けに入ろうとするが、春華はかたくなに拒む。
「邪魔しないで！」

「邪魔つて、お前……」

「ねえ、ミーちゃん……。ごめんね。あの時気づけなくて」

猫は答えない。全身に力を溜める。

「いま、開放してあげるからね」

猫が咽喉に向かつて、突進する。葎花の母と同じように咽喉を食い破るつもりだろうか。

「鳳凰・弐の太刀」

刹那、猫には春華の姿が消えたように見えたはずだ。

高速移動によって猫の背後に回った春華は弓矢を構えていた。

そして、放たれた矢は、鳳凰をかたどった焰となり、猫を包み込んだ。

『グアー、熱い！アツイ！』

悪霊が浄化されていく、そして、霊が出てきた瞬間に巽が猫と霊を千切り離す。

焰がおさまった後、春華は猫を抱き上げた。猫には傷一つない。

だが、もう息をしてはいなかった。

「春華……」

「きつと、猫又になった時点で、執念と恨みだけで生きてて、でも、それを必死で抑えて生きてたんだと思う。それって悲しい生き方だと思うの。独善だけど、そこからその子を救えて私は満足」

「そうか、でも、泣きたいときは泣いたほうがいいぞ」

「なにいつてんのよ、泣くわけ……。あれ、あれ？」

「我慢するなよ」

「馬鹿じゃない！？これは心の汗よ！」

目からぼろぼろと涙を流しながら、春華はなおも強がり言う。

優しい表情で、巽は春華をそっと抱き寄せる。

「これで誰にも見えないだろ？」

春華は理性のたがが崩れていくのを感じた。それでも必死で言葉をつむぎだす。

「……ばか、あんたのせいよ」

第十八話：敵その4（後書き）

その後、春華が泣き止むまで霊はほうって置かれるのだった。

第十九話：精霊流し 天台庄助編

「で、あんたの未練は？」

ようやく、春華が落ち着いて先に帰した巽は霊に質問した。

「僕は殺されました。その犯人が許せない。それが心残りです」

「相手は覚えてるのか？覚えていたらその情報を教えろ」

巽は催眠眼で情報を聞き出す。

「はい、僕はある研究所に勤めていたんですが・・・」

情報を洗いざらい聞き出すと、巽は霊（名を天台庄助という）に、催眠眼を切って問いかける。

「ところで、あんた人を殺してるな・・・」

庄助は戸惑いながらも答える。

「・・・はい」

巽は淡々と質問を続ける。

「何人殺した？」

「え・・・？」

巽は「ただ」相手の目を見た。だが、庄助の身体は震え上がる。まるで蛇に睨まれた蛙である。さらに、淡々とした口調が追い討ちをかける。

「何人殺した？」

「ご、ごにんです」

「そうか・・・、残念だが、お前は地獄行きだ」

「は？」

「殺人を犯した人間が天国に行けるとしても？」

「でも・・・」

「答えは聞いていない。地獄門開け！」

突如として、庄助の後ろに門が出現する。ロダンの地獄門に似たその門からはまがましいオーラが噴出している。

「あ、あ・・・」

振り返った庄助は、何も口に出来ないでいた。しかし、それでも何とか助けを求める。

「た、た、助けてくれ」

「最後の言葉はそれで良いか？」

「た、助け・・・」

門が開き、中から多数の黒マントを着た骸骨と巨大な骸骨が現れた。それらは、庄助にまとわりつく。

「いやだ、いやだ！」

無言で見つめる巽。

「ふわ、うあ、ふわあああああああああああああああああああああああああ！」

庄助は断末魔の叫びをあげながら地獄門の中に吸い込まれていった。

地獄門が消えると、巽はどこかに立ち去った。

どこかの部屋、モニターがたくさんある暗い部屋に一人の男がいる。一つのモニターに今までの一部始終が映し出されている。

「ありがとう、庄助君。君のおかげで研究は完成だよ。しかし、この場所がばれたか・・・。ふむ、データは取れているし、最新の研究体はもう移してある。破棄しても良いだろう」

そして、男は去っていった。

龍弥と葎花は龍弥の家に戻った。警察はこの犯行は葎花には不可能と断定したのだ。

実際、葎花の母を殺したのは妖怪なのでこの判断は正しいことになる。

葎花は家に着くと風呂で血の匂いを洗い流し、すぐに眠った。

「家で預かるのはいいけど、葎花ちゃんのお父さんはなんて言うの？」

龍弥の母は、これからのことについて質問されて、龍弥は葎花の父との会話を話し始めた。

「これからどうするんですか？」

龍弥は葎花の父に聞いた。

「葎花はしばらくホテルかどこかに泊まらせるよ。まあ、葎花の希望によるけど、君さえ良ければ、僕は君の家でも構わないよ」

龍弥は少しびっくりした。葎花から父親は寛容で優しい人だとは聞いていたが、年頃の娘を男の家に泊めてもいいのだろうか？

「僕は、構いません。でも、本当にいいんですか？」

「ああ、君は優しい子の様だし、葎花も君を信頼してるしね」

「えらく寛大なお父さんね」

母は少し啞然としたように話す。龍弥もそれに同意するように返す。

「だよね、俺も何度も聞き返したくらいだし」

「むーん、じゃあしばらく家で預かることになるわけね。部屋はどうしようかしら？」

「確かに」

しばらく二人で考え込んでいると、それまで黙っていた里緒菜が突然話し出した。

「私の隣の部屋空いてるじゃない」

龍弥は怪訝な顔をしながら問いかける。

「あの部屋は、物置だろ？」

「片付ければいいじゃない」

「まあ、そうだけど・・・」

「今夜はお兄ちゃんの部屋で寝てもらって、明日部屋を片付けてお兄ちゃんがそっちに移ると」

「ちょっと待て、俺が移るの？」

「そうだよ。レディーに元とは言え、物置に寝てもらうの？」

「いや、そうかもしれないが・・・」

「待つて、里緒菜」

まくし立てられて、窮地に立たされた龍弥に助け舟を出すように、母が待つたをかける。

「寝るだけなら片付ける必要は無いわ」

助け舟ではなかった・・・。

「それもそうね。ナイス、お母さん」

「ちょっと待て！」

「それじゃあ、私達もそろそろ寝ましょうか？」

「シカト！？シカトなの！？」

「おやすみなさい」

「はい、おやすみ」

二人はそれぞれの部屋に戻っていった。一人残された龍弥は、しばらく呆然としていたが、しばらくして物置部屋に向かった。

「片付けよ・・・」

孤独に片づけを開始した。

第二十話：擬似悪霊その1

そこは、龍弥達の住む街外れにある廃墟だった。壁にはツタがはびこり、崩れかけているところもある。地元の人間は誰も近づかない、元は何に使われていたかなど誰も知らない。

時刻は真夜中、そんな建物の前に、三人の高校生がいる。龍弥、巽、春華だった。

「ここなのか？」

龍弥が巽に問いかける。

「ああ。猫又のときにとりついてた悪霊が全部はいてくれたよ」

春華は汗をたらしながら、二人に問いかける。

「ねえ、やっぱやめない？ こういうのは、警察のやることだし、気味悪いし・・・」

「それじゃあ、帰ればいいだろ？」

龍弥はすました顔で歩き出す。

「ちょ、ちよつと！」

「警察に言っただって、調査なんかしてくれないぜ？」

そう言っ、巽も敷地内に入っていく。

「ちよつと、一人にしないでよ！」

一人にされそうになった春華は、慌ててついて行く。

時間は19時間前にさかのぼる。

龍弥はようやく寝るスペースを確保して、2〜3時間程度眠っていたところだった。

ピロリロリー　ピロリロリー

携帯が鳴る。龍弥は眠たい目をこすりながら、のそのそと起き上がり、携帯をとる。

「もひもひ？うちは蕎麦屋じゃありませんよ？」

『寝起きか？』

「うちはすし屋です」

『・・・寝起きなんだな』

「ところで、どちらさまで？」

『俺だよ俺』

「振り込め詐欺なら、お断りですよ？」

『いい加減に起きろよ！巽だ！』

「響さん所のお坊ちゃんで」

『いい加減目を覚ませ、てめえは！！』

受話器越しに大喝されて、耳がキーンとなる龍弥。そのおかげで、龍弥の目は覚めたが・・・。

「もう少し待ってくれりゃあいいのに・・・」

『電話代の無駄だ』

「けちだな」

『何が悪い？』

「それで何の用件？」

話が脱線して無駄に長くなるのは嫌なので、龍弥は話を進めた。

『ああ、猫又は俺等で退治した』

（俺等？）

『それで、その悪霊が千絵さん殺しを依頼した人間だった』

「な！？」

巽はさらに続ける。

『それで、その悪霊の研究をしている人間も分かったぜ。どうする？』

「決まってるだろ？」

『そうこなくっちゃな。じゃあ・・・』

「待った！」

巽に待ったをかける龍弥。強い語調だったので、巽も言葉が止まってしまう。

「もうちょつと寝かせて」

『ちょ、てめー!』

ピ

龍弥は通話を終了し、電源も切って、また眠りについた。

龍弥たちは廃墟の中を当ても無く歩いて・・・、もとい、探索していた。

懐中電灯で辺りを照らしながら、龍弥は不思議そうに話し出した。

「にしても、契約者なのになんでお前は、幽霊とか怖いんだ？」

春華は巽に引っ付き、びくびくしながら歩いている。声も震えている。

「急に出てくるのが嫌なのよ。幽霊自体が怖いんじゃないわ」

「ふーん、じゃあこれは？」

龍弥はふざけて、のっぺらぼうに変化して、春華の方を向く。

「いやー!」

ばすん!

「いて!」

ハリセンで叩かれる龍弥。巽は冷ややかな目で二人を見ながら、さつさと先に進む。

「ちょ、無視すんなよ」

「無視はしてねえよ。軽蔑してるんだ」

「そうよね。軽蔑もんだよね」

巽は、春華の顔を見つめながら……。

「お前もだよ。ってか、お前ら何しにきたのか分かってんのか？」

春華は、石化したように固まる。一方、龍弥はじと目で巽を睨みながら、鋭く切り返す。

「分かてるけどな……、二時間も歩いて、何も見つからないのはどういう意味だろうな？」

「迷ったんだろ？」

さも当然のように言う巽に対して、龍弥は怒鳴りつける。

「誰のせいだと思ってんだ！」

『ねえ』

「なんだ!？」

九尾にさえ怒鳴りつける龍弥。どうやらイライラが限界に達しているようだ。だが、九尾は軽く流して先を続ける。

『近くに、悪霊のにおいを感じるんだけど』

「悪霊か、まあ、悪霊を研究していた場所だし、これだけの廃墟だ。出てもおかしくは無いが……」

巽は、九尾が異変を察知したのに気づいて、言葉を濁す。龍弥も自分なりの推論を話す。

「悪霊にはなっていない地縛霊じゃないのか？」

『うーん……、なんか地縛霊とも違うんだよね……』

「近づいてみるしかないな……」

ここにいたのでは、これ以上の情報は入らないと判断したのか、そんな事を提案する巽。

「確かにそうだな……」

「私は、反対よ！」

ようやく会話に参加してきた春華は、断固として反対した。巽と龍弥は異口同音に発言した。

「「怖いんだろ」」

「べ、別に、怖くなんか……、って置いてくな!」

龍弥と異はまた無視して歩きだしてしまったので、
はついていくしかなかった。またもや春華

第二十話：擬似悪霊その1（後書き）

番外編の「エイト・アイズ あなざー・すとーりーず」も連載を開始しました。よければそちらも読んでみてください。（まだ一話目ですが）

第二十一話：擬似悪霊その2

龍弥達が先へ進んでいくと、行き止まりにたどり着いた。

「なあ、何でこうなるんだ？」

龍弥は嘆くように言った。ようやくないかの手がかりを見つけて、それをたどってきたらこの有様である。

『んー？この先に何かあるみたいなんだよ』

九尾はしきりにかきまわっているが、行き止まりであることに変わりはない。巽は壁に近づいて、叩き始めた。乾いた音があたりに響く。

「空洞？」

「ああ。この先に空間があるみたいだな。多分、隠し・・・」

巽が言い終わらないうちに龍弥は刀を取り出し、壁をばらばらに分断してしまった。

「ら、乱暴な・・・」

春華は呆然となる。

「お前、本当に天才か？」

巽もあきれたように問いかける。

龍弥は二人に振り向き、にかつと笑いながら答える。

「時間の無駄だろ？」

二人は呆然としながら龍弥を見つめる。龍弥は前に向き直り、先へ進んで行く。

進んでいくと、広い空間が広がっていた。外の廃墟とは違って、綺麗な場所でもあった。イメージとしては病院を連想させるような場所だった。

「ここは、一体？」

龍弥は率直な疑問を口に出した。

「さあな、これまでの情報から察するに、研究施設が妥当だと思うが・・・。分かれて調べようか」

巽の意見に龍弥はうなずいたが、春華は猛反対をする。

「いやよ！か弱い者を一人にするなんて、何考えてんのよ！」

「・・・わかった。お前は巽と組め！俺は一人でいい」

龍弥はあきれながらもそう提案してそれで決定した。

龍弥は物色をする為にある部屋に入った。そこには巨大なカプセルが設置されていた。そのほとんどは、空だったが、一つだけ中心あたりに黒い物体が漂っているカプセルが有った。

「ん？これ悪霊っぽいような・・・」

「さっき言ってた。悪霊のような悪霊じゃないようになってやつか？」

「いやあ、それじゃないっぽいのよ」

九尾はしきりに首をかしげながら答える。

龍弥は一步前に出て、カプセルに触る。ひんやりとした感触が手のひらに伝わってくる。そして、手のひらから全身に冷たさが広がっていく。

それは、普通の“冷たさ”ではなかった。ある主の冷たい感情、憎悪や嫉妬、絶望や怨み、それらの負の感情だった。

龍弥はぱつと手を離す。

「大丈夫！？」

九尾が慌てている。全身にはかなりの汗をかいていた。

「ああ、大丈夫だ」

龍弥は何とか返事をする。そして、すぐにその部屋を出ようとしたが、そのときに何かの気配がした。

「なんだこれ！？」

「九尾、お前もか！？」

『何者かがいるようですね。しかも、こちらを敵視している』
龍王が冷静に推論を述べる。

強力な気配だったため、龍弥は念のために能力を開放した。

「龍王開眼・紅蓮双剣」

巽と春華の入った場所は、さつきと違って、監獄のような場所だった。

「なに、ここ・・・」

そこらかしこには、骸骨が転がり、中には腐乱したしたいまで有るような気がした。

「まあ、人間の死体置き場だな」

巽は骸骨を足で蹴り飛ばしたりしながら、とんでもないことを平気で言つてのける。

「こ、こわいこと言わないでよ」

「悪霊を研究していたらしいから、実験に使われた人間だろ」

「だから・・・」

「俺達が追つてるのは、こういう人間だ。それを理解しなけりゃ・・・」

巽が厳しく言つてのけようとしたとき、気配がした。思わず巽にしがみつくと春華。

『・・・巽』

「ああ、わかつてる。春華、お前もわかつてるだろう？」

マホラガに呼びかけられて、巽は臨戦態勢をとる。

「わ、わかつてるわよ。鳳凰・壺の太刀」

巽にうながされて、春華も薙刀を構える。

それはヒグマのような大きさで、頭は猿、手足は虎、尻尾は蛇という生物だった。九尾曰く、鵜という妖怪らしい。

（速さではついていける。むしろこちらの方が速いが・・・）

龍弥は苦戦を強いられていた。大丈夫だと言ったものの、カプセルに触れた影響か、身体の動きに切れが足りない。

鵜は容赦なく、執拗にそのつめで、その牙で、攻撃を繰り返して

くる。

「はぁあっ！」

龍弥は気合と共に、鵜を一閃する。炎の力を込めた刀で切りつけられて、鵜の身体は燃え上がるが、すぐに消えて、また立ち上がった。

「不死身か！？大体、何で浄炎が効かないんだ！？」

『悪霊が憑いてないのよ。鵜はもともと凶暴な妖怪だから、襲われたら殺すしかないわ』

浄炎を何度も使っても倒れない鵜に対して焦りを感じる龍弥に、九尾は冷静に告げるのだった。

「いや、まだ手はあるぞ」

『殺す以外に？』

「ああ」

そう言つて、龍弥は龍王の新たな力呼び出す。

「龍王開眼・蒼電双剣」

力が解放されると、辺りは急に冷気に包まれ始めた……。

第二十二話：擬似悪霊その3

巽と春華は窮地に追い込まれていた。

「何なのよこれは！」

春華は叫びながら、その物体を切る。しかし、その物体は分裂してまた襲い掛かってくる。

「どうやら、この白骨達はいくらにやられたらしいな」

物体を殴りながら巽は推理した。しかし、巽のパンチは効いていなかった。春華はそれを見ると鋭く突っ込む。

「悠長に推理してる場合か！」

春華と巽は無限に分裂し、打撃も効かない物体に襲われていた。鳳凰・弑の太刀なら効いたが、制限回数を使い切ってしまったて、もう放てないのだ。

次第に物体は増えてくる。春華は巽に問いただした。

「あんた、何とかしなさいよ！」

巽は冷静に答える。

「無理」

その言葉と態度にはるかは激昂する。物体たちはすぐそこまで迫っていた。

「何だよ！」

「俺の能力のひとつは直接でも間接でも、相手の目を見なきゃいけない。もうひとつは耳から聞かせないといけない。こいつら、明らかに目も耳もないだろ」

「ああ、使えない！こんなことなら龍弥と組むんだった！」

「ああ、そうだな。俺も同感だ。って、言ってる場合じゃねえな」

巽と春華が押し問答をしている間に、周りを物体に取り囲まれてしまった。

「どうする？」

巽が春華に聞く。ここにいたって、春華も取り乱すわけにも

行かず決断する。

「一点突破よ」

「了解」

春華と巽は大声を上げながら、入ってきた扉のほうへ春華は薙刀を巽は拳を振り回しながら走った。

冷気に包まれた部屋で、鵜と対峙していた。龍弥の瞳と刀身は青に染まって、冷気が放たれていた。

鵜は確実に動きを鈍らせていた。龍弥は少しずつ、鵜に近づいていく、近づくとたびに鵜にかかる冷気が強くなり、さらに動きを鈍らせる。

ついには鵜の目の前に立つ、龍弥。鵜は力を込めて襲い掛かろうとするが、それよりも早く、龍弥は鵜を切る。

すると、鵜の体がどんどん凍り付いていき、その上からさらに氷が覆う。最後には鵜の氷漬けが完成した。

「ふう。これで大丈夫だろ」

龍弥は胸をなでおろし、歩き出そうとした。

パリン

何かが割れるような音がした。振り返ったが鵜の氷が割れたわけではない。

「なんだ？」

龍弥が辺りを見回すと、黒い球体が飛んできた。龍弥はそれをとっさによける。球体はそのまま氷漬けの鵜にぶつかり、鵜の体に入ってしまった。

次の瞬間、鵜を覆っていた氷が割れ、鵜が外に飛び出してくる。「どういうことだ？」

『悪霊に取り付かれたときと同じ感じだけど、なんか違う。悪霊じゃない!?』

九尾は混乱した。あの状態は完全に悪霊に取り付かれている。目ではそう見える。しかし、本能は違うと告げていた。

『差し詰め、人が作り出した悪霊、擬似悪霊つてどこじゃねえか?』
ラグナロクが口を開いた。九尾がそれに反応する。

『何よ、それ!?』

『後で説明してやる!それから、龍弥!あれはもう殺すしかない』
龍弥は困惑しながら聞く。

『なぜ!?』

『それも後で話す!今は、戦え!死にてえのか!?』

『くっ!龍王開眼・光琳双剣!』

龍弥の瞳が金色に変わる。そして、刀身も金色に輝き始める。

鶴がこちらを向き、襲い掛かってきた。そのスピードは今までの比ではなかった。しかし、龍弥は冷静にそれに対応する。

片方の刀で攻撃を受け流し、もう一方の刀で突きを繰り出す。それは鶴の胸に突き刺さる。すると、突然鶴の背中に大穴が開き、鶴はその生命を終え、ゆっくりと倒れていった。

『何で、最初から使わなかったのよ!?』

九尾はしきりに感心していたが、龍弥は答えなかった。そして、龍弥もゆっくりと倒れていった。

『え!?なにになに!?』

九尾はびっくりして問いかけるが、龍弥は答えなかった。息はしているようだが、全く目覚めようとしなない。

『どうということよ?』

九尾は難陀に問いただす。難陀は、心配しながら告げた。

『おそらく、あの球体が原因だろう。龍弥はあれを完全に破壊した。だから、限界が来たのだ。それに、かなり消耗していたようだしな』
『そういえば、気配が消えてる』

九尾は球体の気配が無いのに、はっと気づくのだった。難陀はラ

グナロクに質問する。

『では、擬似悪霊とは何か、教えてもらいましょうか？』

『あれは、もう数百年も前の話だ。わしが前の契約者と共にあったとき・・・』

ラグナロクはゆっくりと話し出した。

第二十二話：擬似悪霊その3（後書き）

これからの参考にしたいので、感想などお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3458b/>

エイト・アイズ

2010年10月9日02時56分発行